魔法少女リリカルなのは EOSE ～Eternal Breath～

樟葉櫂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのは　ＥＯＳＥ　～Ｅｔｅｒｎａｌ　Ｂｒｅａｔｈ～

【Ｎコード】
Ｎ９３２６Ｒ

【作者名】
樟葉櫂

【あらすじ】
ジュエルシード事件、闇の書事件より十年の月日が流れ去った。
短期間に起きた二つの大きな事件は、多くの者達の人生を大きく変化させた。

ある者は、自分の部隊を立ち上げるべく、各所を走り回り。
ある者は、執務官として多忙かつハードな日々を送り。
ある者は、戦技教導官として未来のエース達を鍛え。

ある者は、執務官長として自分の道をマイペースに進み続け。
ある者は、部隊長として個性派が揃う部隊の運営に勤しみ。
ある者達は、部隊長の下で隊員として与えられる任務をこなしていた。

嘗ての小さき翼達は今、翼を大きく広げて大空へと飛び立っている。
……そして、自分達が育った時と同じように。
巡り会った小さき翼達を育て、大空へと飛び立たせようとしていた。
――――その先に待ち受けている、大きな困難を知らずに。

これは、小さき翼達と翼達を飛び立たせようとするエース達。
……そして、第一線を退いた嘗てのエース、ストライカー達の物語。
そう。それは例えるのであれば、リレーのバトンパスのように――――。
今の世代から次世代への交代。それを象徴する物語である。

『魔法少女リリカルなのは　ＥＯＳＥ　～Ｅｔｅｒｎａｌ　Ｂｒｅａｔｈ～』、始まります。

プロローグ：月日は流れて（前書き）

と言う訳で、新作です。
前作ＥＯＳＥ本編より十年後、アニメで言うＳｔｒｉｋｅｒＳ編のお話を主軸にして書いて行きます。
まだ前作が完結していませんので、前作の終盤部分に関わるネタバレは完結するまで極力慎みますが、もしかしたら書かざるを得ない場合があります。
ですので、ネタバレが受け入れられない方は申し訳ありませんが、こちらでお戻りください。

ネタバレが大丈夫な方のみ、このまま本編へお進みください。
それでは、どうぞ！

プロローグ：月日は流れて

――――負けられない戦いが、あった。

自分の過去を振り切る為の戦いを、乗り越えた。

――――かけがえの無い、仲間達が居た。

戦いの中で様々な人と出会い、固い約束を交わした。

――――数々の強敵と、意志をぶつけた。

様々な理由を持って立ち塞がった者達と、刃を交えた。

――――理不尽な現実に、涙を流した。

愛する者が消え、涙が枯れ果てるまで友と泣いた。

――――自分が守るべき者達を、見つけた。

色々な形で、“守るべき対象”をそれぞれが見つけた。

――――大切な人を守れずに、苛立った。

自らの大切な人を守れなかった自分に、憤りを感じた。

――――同じ過ちは二度と犯さない、と誓った。

もう同じ過ちは誰にもさせないと、一人心の内で決めた。

――――新しい家族が、出来た。

形は様々ではあったが、家族が増えた者達が居た。

――――仕事の中で、色々な者達と出会った。

仕事を続けて行く最中で、個性豊かな者達に何人も会った。

――――自分と友を信じて、歩み続けた。

かけがえの無い友と自分自身を信じ、目の前に示された道を歩き続けた。

――――そして、今。目の前には、何が見えていますか……？

ジュエルシード事件、闇の書事件より十年の月日が流れ去った。

短期間に起きた二つの大きな事件は、多くの者達の人生を大きく変化させた。

嘗ての小さき翼達は今、翼を大きく広げて大空へと飛び立っている。

……そして、自分達が育った時と同じように。

巡り会った小さき翼達を育て、大空へと飛び立たせようとしていた。

――――その先に待ち受けている、大きな困難を知らずに。

これは、小さき翼達と翼達を飛び立たせようとするエース達。

……そして、第一線を退いた嘗てのエース、ストライカー達の物語。

『魔法少女リリカルなのは　ＥＯＳＥ　～Ｅｔｅｒｎａｌ　Ｂｒｅａｔｈ～』、始まります。

――――――――――――――――――――

――――新暦六十六年、三月上旬。
第九十七管理外世界。惑星“地球”、海鳴市にて。
市の中心部に近い通りを歩く、二人の男女の姿があった。

「すまないな、私の我儘に付き合って貰って」

「気にすんなって。こっちも丁度、買いたい物があったからな」

女性の方は、長い銀髪に紅色の瞳と言った容姿に、白いセーターと薄黄色のスカートと言う服装。
一方の男性の方は、女性にも劣らないくらいの長さを持つ金髪と同じ紅色の瞳。
灰色のシャツと青いジーンズ。シャツの上からは厚手の黒いジャンパーを着ていた。

お互いに、両手にはたくさんの紙袋。
そしてその中身は二人とも、たくさんの衣類で埋め尽くされている。
季節は春。そろそろ冬物から春物への移り変わりの時期だが、今日

はまだ肌寒い。
故に二人とも、三月にしてはきっちりと防寒対策のなされた服を着ている。

「レン・テスタロッサ、お前は執務官長なのだろう？　こんな所で油を売っていて良いのか？」

「今日は自由待機（オフシフト）なんだよ、リィンフォース。何か無い限りは暇人さ」

女性……リィンフォースと男性……レン・テスタロッサ。
滅多に見られない珍しい組み合わせの二人は、言葉を交わしながら歩き続ける。
両手に持つ紙袋の多さ故に本人達はゆっくり歩いているつもりだが、周りから見れば遅くは無く。
……むしろ、多くの一般人が歩く速度よりかなり速いくらいだ。

「成程。となると、執務官達は大変じゃないのか？　お前が普段こなしている膨大な量の仕事を代わりにやるのだろう？」

「俺がやってるのはクロノ達とは少し違った奴ばかりだから、そこまで影響は無いさ。緊急を要する物だって少ないし」

「つまり、いつも暇と言う事か」

「そうそう……。って、おい！？」

会話の流れで答えていたレンは、リィンフォースの言葉に答えた直後に驚いた表情を浮かべた。
そんなレンを見てリィンフォースは小さく笑い、冗談だ、と答える。

冗談には聞こえないんだが、と言うレンの問いかけにもリィンフォースは笑ってはぐらかすのみ。
そうしたやり取りを交わしながら歩いていた二人は、とある一軒家の前に辿り着いていた。
カメラ内蔵のインターホンの脇には、『八神』と書かれた表札がある。

……八神家。元々は八神はやてと言う少女が、一人で暮らす家だった。
だが今は、はやて本人を含めて六人と言う、結構な大所帯になっている。
それには様々な事情があるのだが、今ここで全てを語る必要はないだろう。

「話は変わるが……。あの時はすまなかった、私を助ける為にお前は……」

「俺は誰も悲しまない最善の選択をしただけだよ。能力の一つや二つぐらい、どうって事ないから気にするなって」

リィンフォースが険しい表情で切り出した言葉をレンは変わらぬ表情で一蹴。
そして、明るく笑いながら自分は全く気にしていない、と強調しながら返事を返す。
勿論、これでリィンフォースが納得する訳が無い。リィンフォースは尚も食い下がる。

「だが……！」

「いいんだよ。フォルムチェンジはある意味、自分への甘えだから

な。正直な所、無くなってくれて嬉しいさ」

しかし、レンはリィンフォースに発言する事を許さず。
変わらぬ表情で、あの日から自身が使えなくなった能力の事を話題に出した。
……だが、リィンフォースにはレンは同じ笑顔をしていても、先程とは違った表情に見えた。
――――後悔はしていないが、何処となく悲しそうな表情に。

「ま、俺の事は大丈夫だ。だからお前はずっと、はやての傍に居てやれ。それじゃな」

レンはそう言うと、リィンフォースの制止も聞かずにそのまま歩いて行ってしまった。
残されたのは、行き場の無いやるせない気持ちを抱えたリィンフォースのみ。
既に小さくなった後姿を見、そして家の二階の窓へと視線を上げてそっと呟く。

「なら、お前のその言葉通り、私は主はやてのお傍にずっと……」

「リィンフォース、どないしたん？　レンさんと買い物に行って来たんやないの？」

と、リィンフォースは聞き覚えのある声を聞き、その方向を振り向く。
そこには、車椅子に乗った茶髪の少女……。八神はやてが顔を上げてこちらを見ていた。

「あ、はい。今しがた、別れた所です」

「そっか。なら、早いとこ中に入らないと、風邪引いてしまうで？」

「そうですね。入りましょうか」

はやての言葉に応じて、リィンフォースは車椅子の後に回る。
インターホンを押し、施錠されている鍵を開けるように頼んで、一息つく。
変わらぬ空。少しずつ変化して行く日常。その中に、自分が居る。
それだけでもありがたい事なのに、更に“家族”が居る。
孤独な日々を過ごしてきたリィンフォースにとって、日常を平穏に過ごせるだけでなく。
“家族”と過ごせる事は、これ以上に無い幸せな事であった。

――――翼が折れるその時まで、私は空で主はやてをお守りしよう。

この身果てるまでの間、自身に課せた使命。
それは、空ではやてを……自分の主を守り抜く事。
多くの人々を倒す為に使った力を、今度は“守る為”に使う。

――――最後の主から貰った、“祝福の風（リィンフォース）”の名に誓って。

多くの人々を巻き込み、多大なる被害をもたらした“ジュエルシード事件”と“闇の書事件”。
本来であれば二つの事件にはそれぞれ、“二度と会えぬ永遠の別れ”が存在していた。
……しかし。二つあった“二度と会えぬ永遠の別れ”は、双方とも意味を成さずに事件終結を迎えた。
否、片方は意味を成したとも言えよう。だが、それは真ではなく虚。
全てを見下ろす神の気紛れに過ぎない。

いずれにしても、結果は本来定められた運命とは異なる結果へと進んだのだ。

――――しかし、これが終わりではない。物語の終わりは、新たな物語の始まり。

次なる物語の始まりは、新暦七十五年四月。

“古代遺物管理部機動六課”が試験運用を開始する、その数週間前にまで飛ぶ。

“ジュエルシード事件”と“闇の書事件”。

二つの事件の解決に関わった執務官達は、一部を除いて既に第一線を退き。

後方から、その当時の“小さき翼達”を見守る役目を務めている。

そして、“ストライカー”と呼ばれる優秀な魔導師・騎士達にするべく。

“エース”となった小さき翼達が呼び寄せた、無限の可能性を秘めた雛鳥達。

彼等は“定められた物語”の主役として、数々の難事件に立ち向かう事になる。

しかし、彼等はあくまで“定められた物語”の主役。この物語の本来の主役ではない。

本来の主役は、“定められぬ物語”で様々な事件に立ち向かった者達。

その中でも一際優秀な、次の世代で“剣帝”を名乗る事になる、一人の少女である……。

――――――――――――――――――――

新暦七十五年四月、ミッドチルダの首都クラナガン。
広々とした邸宅が立ち並ぶ区画に建つ、周りよりも一回り大きい邸宅。
……豪邸と呼んだ方が相応しいだろうか。その邸宅のリビングに二人の女性の姿があった。

一人は銀色の髪を腰の辺りまで伸ばし、ストレートに下ろした女性。
もう一人は、金髪を同じように腰の辺りまで伸ばし、先端の辺りをリボンで纏めた女性。
金髪の女性は、白いシャツに黒いスカートと言う仕事着と思われる服装。
銀髪の女性はと言うと、薄橙色のシャツと薄黄色のスカートの上からカーディガンと言う私服だった。

「と言う事は、フェイトちゃんも今月から設立される“機動六課”に転属する訳？」

マグカップに入った紅茶を飲みほした銀髪の女性は、金髪の女性……フェイトに問いかけた。
同じように、紅茶を飲んでいたフェイトは中身の残ったマグカップをテーブルに置き、問いかけに応える。

「うん。……あ、でも私の場合は転属じゃなくて出向扱いなんだけどね、エリィ義姉さん」

それに対して、銀髪の女性……エリィはふ～んと呟き。
腕を伸ばして軽く伸びをすると、ゆっくりと吸った空気を吐き出した。

太陽の温かい日差しがガラス窓から差し込んでおり、部屋の中は適度に温かい。
季節はまだまだ冬であるが、冬でも今日は比較的温暖な日なのであろう。
部屋の中にある暖房機器の殆どは、スイッチが入っていない。

「じゃあ、レンも？」

「そこは私もまだ分からない。何でも、デバイスマスターを兼務するみたいだし……」

「デバイスマスターもやるの！？　……他の人に任せておけばいいのに」

「私もそう思うんだけど……。本人はやる気満々みたい」

話題は、この場に居ない邸宅の主へといつの間にか変わっていた。
半年ほど前から、所属している部隊の長期間の次元航行でずっと帰って来ない家主。
その前後から、彼が従えてる騎士達ともう一人の妹もまた、長期間の任務で帰って来ていない。
故に。一年を通して家に居るエリィを除くと、自宅に帰って来る大人はフェイトのみと言う状況が続いている。
しかし、そのフェイトも執務官と言う役職に就いているが故、月に一回程度しか帰って来ていなかった。
……本当に大丈夫なのだろうかと思うかもしれないが、その辺りは友人達の助けで何とかなっているとか。

「母さん、フェイト姉さん。その“機動六課”って言う所にはどんな人が居るの？」

と、そこへ一人の女の子がやってくる。
エリィと同じ銀髪、瞳の色はフェイトと同じ紅色。……二人を足して割ったような容姿をしていた。
小さな弓の形をしたペンダントを首からぶら下げており、そのペンダントからは僅かな魔力が感じられる。
女の子は先程から、エリィとフェイトの話を聞いていたらしく。
四月からフェイトが新しく向かう部署……“機動六課”について、二人に問いかけた。

「殆ど、クリスが知ってる人達だよ。なのはさんにはやてさん。後は、シグナムさんとかヴィータさんとか」

「後、リースやアリス達も召集する予定だ、ってレンが言ってたわね」

「すっご～い！　はやてさん、物凄く強い部隊を作ったんだね！」

フェイトとエリィの話に、女の子……クリスは目を輝かせており、どうやら興奮している様子。
こういう所は父親の血を全く引いていないな、とエリィはふと思った。

「そう。“機動六課”は、どんな状況にも対応出来る凄い部隊なんだよ」

『ガラスの虹を浮かべた、砂の上～♪　幻想(あした)を謳うより～♪』

……と、フェイトが笑って答えた時だった。
呼び出し音にしては何とも豪華な音楽が、リビングの隅にある電話

より奏でられる。
エリィは鳴り続ける電話の元へと向かって、受話器を取って会話に応じた。

「はい、ハラオウンです。……フェイトちゃん？　ちょっと待ってね」

電話を取ると、一言二言だけ話し……。
直ぐにエリィは、フェイトへと受話器を手渡す。

「フェイトちゃん、ルミナスちゃんから電話よ」

聞き覚えのある名前にフェイトは首を傾げた。
何せ、エリィの口から出た名前は普段は通信や念話でやり取りをする相手であり。
そして尚且つ、常日頃から過酷な任務に身を投じている相手でもあったからだ。
半分疑心になりつつも、手渡された受話器に向かってフェイトは言葉を投げる。

「はい、もしもし」

【あ、フェイト？　休暇中にごめんね】

受話器を取ったフェイトの耳に聞こえて来たのは。
かつての同僚で、現在は首都航空隊に所属している女性。
ルミナス・シュバルツ一等空尉。それが電話相手の名前である。

「ううん、大丈夫。……それで、どうしたの？」

【ちょっと見て欲しい物があって……。今から地上本部までこれる？】

“地上本部まで出て来て欲しい”。

次元航行部隊で働くフェイトに対しての、この言葉。それはつまり……。

「……レリック関連？」

【そう。結構、核心に近づくかもしれない物が出て来たの】

今、追っている事件の詳細が掴めた……と言う事になる。

最近になり、フェイト達が中心となって追っているロストロギア。

レリックに関係する物が、どうやら発見されたらしい。

一瞬迷ったフェイトだったが、次の瞬間には迷わず言葉を発していた。

「分かった、直ぐに行くよ」

【ありがとう。受付に話はしておくから、来たら受付にその旨を伝えて】

「了解。それじゃあね」

何度か言葉を交わし、電話を切ったフェイト。

直後にエリィが問いかける。

「お仕事？」

「うん。レリック関連の事で見て欲しい物があるらしくて」

答え、フェイトは椅子にかけていた上着を羽織る。
執務官用の制服は一般局員と違って黒色で、構造も少し異なっているのだ。
一般局員と同じタイプの制服も持っているフェイトだが、普段は専らこちらの姿で居る事が多い。

「分かった。結構遅くなりそう？」

「地上本部だから、そこまで遅くはならないと思うけど……」

そこまで言って、フェイトは口をつぐむ。
確かに行き先は地上本部であり、帰って来るまで時間は掛からない。
……だが、レリック関連となると正直な所、帰りがいつになるか不透明だ。
となるとすると、いざと言う時の保険はかけておかねばなるまい。

「遅くなりそうだったら、連絡するね」

「うん、了解」

フェイトは手早く荷物を纏め、玄関から外へ出ると。
広大な自宅の敷地の中でも、道路に面した一角にあるガレージへ。
止めてある三台の車の内、汚れ一つない黒色に塗られた車両に乗り込む。
スカートのポケットからこの車両のキーを取り出し、差し込んで回す。
直後にエンジンが始動。だが、エンジン音は静かで車内まで音はあまり伝わって来ない。

「いってらっしゃい！」

「地上本部だけど、気を付けてね」

そこまでの動作を終えると、既に車の真横にはエリィとクリスが居た。

久々に堪能する折角の休日ではあったが、呼び出しが掛かってしまったのだから仕方ない。

そう割り切り、務めて笑顔でフェイトは二人の方を向く。

「うん、分かってる。いってきます」

見送るエリィとクリスに手を振った後。

ギアをドライブにして、フェイトはアクセルを少しだけ踏む。

エンジンが千、二千、三千まで回転したのを確認し、アクセルから足を離す。

所謂、“空吹かし”をした後に、サイドブレーキを解除。そして、再びアクセルを踏み込んだ。

直後……。

静かながらも豪快なエンジン音と共に、車は発進。

自宅の前の幹線道路を地上本部の方向へと進んで行った――――。

――――――――――――――――――――

――――時をほぼ同じくして。

次元海を航行中の次元航行艦、“ノクターン”。

半年ほど前から任務でずっと本局を離れ続けているこの艦のとある

一室。
机とベッドとクローゼットだけ、と言う至ってシンプルな構成の部屋に、一人の男性が居た。

「今日はいつにも増してハードだったな、ったく……」

腰の辺りまで伸びた金髪に紅色の瞳。
整った顔立ちと相まって一瞬女性と見間違うが、胸元は限りなく百八十度に近い。
黒を基調とした上着の下は白いシャツで、ズボンも上着と同じく黒基調。
首からは、微かな魔力反応を示す剣の形をしたペンダントをぶら下げている。

――――レン・T・ハラオウン。
“剣帝”の二つ名を持つ管理局屈指の実力者。
そして、“ジュエルシード事件”と“闇の書事件”。
十年前に起きた二つの大規模事件の解決に、深く関わった人物でもある。

「いい加減、我が家に帰ってゆっくりしたいぜ……」

『なら、渡り歩く鳥達で抜け出せば良いじゃないですか』

「んな事してみろ。……確実に始末書の雨が降る」

首元からぶら下がるペンダント……自身のデバイスである、ラグナロクと交わすやり取り。
半分以上は冗談で答えているレンだったが、その内の何割かは本気だった。

今の任務を始めてからもう半年以上、クラナガンにある自宅には帰っていない。
半年以上、慣れない空間で過ごして溜まりに溜まった疲労とストレス。
既に限界は近く、このまま行けば後々の業務に支障が出る可能性がある。

――――帰ったら、温泉にでも行きてぇな。

『時空（とき）を越え刻まれた～～♪　悲しみの記憶～～～♪』

と、レンが思った時だった。
部屋の中に、突如として音楽が鳴り響く。
レンは直ぐに上着の胸ポケットに手を入れ、携帯端末を取り出す。

「ん？　プライベートの方か……」

……が、その端末は直ぐにポケットにしまい込み。
今度はズボンの右ポケットから、似たような携帯端末をもう一個を取り出す。
どうやら音楽の音源はそちらしく、画面が光って内蔵のバイブが振動していた。
レンは通話ボタンを押して、電話に出る際の決まり文句を口にする。

「はい、もしもし？」

【……あ、お久しぶりです。ティアナです】

受話器越しに聞こえて来たのは、実に数年振りに聞く声。
自分が抱いた使命を果たせず、先に旅立って行った親友の妹。

……そして、一人前になるまでは自分が面倒を見る、と心に誓った少女。

「おー、ティアナか。久しぶりだな、元気してたか？」

【はい。……お陰様で、何一つ不自由なく毎日を過ごせてます】

「そうかい。所で、受けるってメールで言ってた陸戦Ｂランクの試験はどうなった？」

【あ、その試験なんですけど……。残念ながら落ちてしまって……。でも……】

「でも？」

ティアナのでも、と言う言葉にオウムの如く同じ言葉を返すレン。しばらくの沈黙の後に、ティアナは少し迷ったような口調で告げた。

【三日間、本局の武装隊で特別講習を受ければ、四日目に再試験が受けられるようにして貰えました】

「お、そりゃ良かったじゃないか。俺の教え子達と一緒に猛特訓、って訳か♪」

【教え子達！？　確か、今の役職って執務官長でしたよね……？】

「あぁ。十年前からずっとそうだぜ？」

【じゃあ、何で本局の武装隊に教え子が……？】

レンの言葉に受話器の向こうのティアナは驚く。
何せ、レンが所属しているのは通称、海と呼ばれる次元航行部隊。
本局武装隊との綿密な接点が、どうしても見出せないからだ。当然である。

「……俺が色々と便利な希少技能（レアスキル）持ちって事は知ってるだろ？」

【えぇ……。何か、関係でもあるんですか？】

「それが原因で昔の上司に目を付けられてな……。散々、色々な事を言われたよ」

自分の暗い過去であるにも関わらず。
後ろめたい感じを全く持たずに話し続けるレン。
そして、遂にその口から自身を侮辱する言葉が飛び出した。

「才能の持ち腐れだとか、能力に振り回されるだけの馬鹿、とかな……。あんまりよく覚えてねぇ」

【酷い……。才能の持ち腐れなんて、絶対に有り得ないのに……！】

「しょーがねぇよ。俺みたいな奴は常に周りから反感を買っちまう。例え本人が、どんな功績を上げてもな」

仕方ない、と割り切った口調でレンは答える。
……希少技能（レアスキル）を持っているが故の、悩みと苦労。
元来から優秀な魔導騎士であったレンは、非難される事が多かったのだろう。

「けど、それでも気が収まらなかったんだろう。俺が今いる艦に配

属されたのが九年前なんだけどさ」

「それからしばらく経った頃に、一年半ぐらい色々な部署をたらい回しにされた事があるんだ」

【たらい回しって……。どんな所に行ったんですか？】

「海は勿論、空、陸、武装隊、教導隊、教育隊……。挙句の果てには士官学校や訓練校にも教師として行ったな」

【じゃあ、私が訓練校に居る時に来たのも――――】

「あれは違う。向こうから依頼を受けて、俺も暇だったから承諾したんだ。強制じゃねぇ」

訓練校、と聞いて自身の記憶に思い当たる節を上げたティアナだったが。

直後にレンに全面否定され、どうやら安心したらしい。受話器越しに吐息が聞こえた。

一瞬だけ笑顔を見せたレンだったが、直ぐに表情を戻して再び言葉を紡ぐ。

「んで、その時に色々な奴に魔法の知識は勿論、デバイスに関しての知識なんかも教えたんだ」

『本当はそれ以上に、無駄な技術を教えてましたけどね♪』

【え……！？】

と、ここで第三者の声が二人の会話に割り込んで来た。

その声の主はレンが首からぶら下げているペンダント……。
彼のデバイス、ラグナロクが発したものであった。
受話器に近い位置で喋った為か、声は受話器越しのティアナにもしっかり届き。
聞いてしまったティアナは、驚いたような声を上げる。

「……馬鹿デバイスは少し黙っとけ、阿呆」

溜息をつき、そう呟くと。
ラグナロクを首から外し、レンはそのままベッドへ投擲。
シーツの上にぐしゃぐしゃになって置いてあった、毛布にラグナロクは綺麗に着弾。
酷いですよ……、と声が聞こえたが無視してレンは話を進める。

「まぁ、そんな訳なんだ。本当、あの時にたらい回しにされて良かったと思ってるよ」

【どうしてですか？】

「結果として、色々な所に顔を知って貰えたからな。いざって時に、色々な所から協力を取りやすくなったんだ」

【あ、成程……】

「そのお陰で今まで何とか生きてるって訳さ。そういやティアナ、陸戦Ｂの試験の後に機動六課へスカウトされたか？」

溜息をついてレンは一旦、言葉を区切ると。
話題を変えて、今度は自分からティアナに問いかけた。

【えぇ、されましたけど……】

「やっぱりな。はやてにお前とスバルを薦めたの、実は俺なんだよ」

【え!?　と言うより、スバルの事を知ってるんですか!?】

「まぁ、昔に色々あったんだよ。伊達に十年以上、局員やってねーからな」

【あはははは……】

十年以上、と言う言葉に渇いた笑いを返すティアナ。
ティアナが生まれてしばらくした頃から、レンは既に管理局で働いている中堅だ。
その若さからは想像も付かないような様々な困難を乗り越えて、レンは今この場に居る。
伊達や酔狂で執務官長をやっていたりなど、していないのだ。

「さてと。六課にスカウトされたのなら、ティアナとは近い内に会えるな」

「それは……どう言う意味で?」

「立ち上げの直前になるだろうけど、その頃に俺も六課に行く事になってるんだ」

【本当ですか!?】

「あぁ、マジだよ。その為には今の任務をさっさと終わらせなきゃならないけどな」

【と言う事はレンさんに教導をして貰う事も……？】

「さぁな。教導はなのはの専門分野だから、そこまでやれるかどうかは分からん」

【あ、そう言えばそうですね……】

教導隊に出向していた、と言う言葉を聞いて。

もしかしたらレンに教えを請う事が出来るかもしれない、と思ったティアナだったが。

機動六課には既に本職の戦技教導官、高町なのはが居る事をすっかり忘れていたらしい。

レンから分からない、と聞いた後に思い出したかのようにそう呟いた。

「さてと、続きはまた今度な。そっちはもう夜遅いだろ？」

【……はい。では、機動六課でお会いしましょう。レンさん】

「おう。じゃあな」

自身の言葉を最後にティアナとの通話を終えたレン。

ふぅ、と息を吐き出してから携帯端末を再びズボンのポケットにしまい込み。

ベッドの上にあった毛布を端に避けると、上着を脱いでベッドの上に寝転がった。

「――――近い内に、か。はてさて、立ち上げまでに帰れるのかねぇ」

『無理ですね。早くても五月の初め頃が精々かと』

独白に近いレンの問いかけ。
それに対して、ラグナロクは淡々と答えた。
聞いた瞬間にやっぱりか、と言う表情になるレン。
元々、立ち上げまでに帰れるなんて事は思っていない。
先程ティアナに言ったのは、やる気を無くさないようにする為の嘘。

「だよなぁ……。サクラ達の方はどうなってる？」

『今、最終調整に入ってます。……あそこの管轄はクロノ提督なので、短時間で済みそうですが』

「クロノ相手なら問題ないだろ。代わりの人員の手配ぐらい、こっちでも出来るし」

『どうにかなるんですか？』

「とりあえずはな。俺の息がかかった部隊から数人、引き抜いて人員補充を出来るようにはしてある」

その言葉を合図にレンは上体を起こし。
手元にコンソールを呼び出すと、キーボードを叩いてディスプレイを呼び出す。
レンによって呼び出されたディスプレイには、五人の顔写真が続けて映し出された。
黒髪の少女、黒髪の女性、金色が混じった茶髪の女性、金髪の少女、黒髪の男性。
五人のいずれも、管理局内ではそれなりに名が知れ渡っている有名

人だ。

類稀なる技術と才能を持つ、若手でも一番の成長株と評される空戦魔導師、サクラ・Ｔ・ハラオウン。

今では廃れた法剣を手にして大空を駆ける、“白き翼”の二つ名を持つエース、蓮華・Ｆ・ジオムント。

種類はあれど剣だけを用いて要求される全てをこなす、剣の道に生きる純粋なる騎士、リース・アークス。

敵とぶつかる最前線を最も得意とする、自他共に認める鉄壁のハイパワーアタッカー、シェリル・ガルド。

前衛から後衛まで何でもござれ、どんな状況にも対応出来る器用なオールラウンダー、ファントム・シェルド。

「サクラ、蓮華、リース、シェリル、ファントム。この五人の穴を埋められる人材を、な」

……いずれもレンの知り合いや家族だ。

自分が呼び出せば直ぐに協力してくれるだろうが、問題はその穴を埋められる人材だ。

五人はいずれも人数の割合が圧倒的に少ない、オーバーＳランクの魔導師・騎士に該当している。

オーバーＳランクの魔導師や騎士は勿論、オーバーＡランクですら探しても中々居ないこのご時世だ。

代わりと成り得る人物などそう簡単には見つからないのだが、レンはちゃんと前々から見つけていた。

現段階ではこの五人には及ばないが、きちんと育て上げれば大化けする可能性を秘めた者達を。

【休憩中の所、申し訳ありません。レン執務官長】

……と、コンソールのキーボードを叩こうとした瞬間。
写真を映し出すディスプレイとは別のディスプレイが現れ、言葉と共に女性の顔が映し出された。
サイドツインテールで纏めた長い茶髪に、黒色の瞳。レンとは違い、一般局員用の制服を身に纏っている。

「別に気にするなって、優衣。どうしたんだ？」

【セフィリア一佐より通信が入ってます】

女性……優衣から用件を聞いた瞬間。
それまで穏やかだったレンの表情が一瞬にして険しい物へと変わる。

――――セフィリアから？　どう言う風の吹きまわしだよ……。

セフィリア・シュバルツ。
陸の司令官を務める、ミッドチルダ御三家と呼ばれる由緒正しき家の出の女性。
陸では珍しいオーバーSランクの騎士で、管理局でもトップレベルの実力を持っている。
自身の立場上、地上本部に赴く事もある為、レンはセフィリアと交流が無い訳ではない。
……が、彼女との今までのやり取りは、何かしらあった時の連絡が大半。
こうした何も無い時にレンからはともかくとして、向こうから連絡

を入れてくる事は滅多に無かった。

「……りょーかい。直ぐに行く」

【よろしくお願いします】

しばし考えた後に、承諾の意をレンは優衣に伝える。
通信を終えて優衣を映し出していたディスプレイが消えると、レンはベッドから完全に起き上がり。
脱いでいた上着を着ると、手元にあったブラシと手鏡で寝転がった時に乱れた髪を軽く整える。

「“機動六課”。果たしてそれが、吉と出るのか凶と出るのか……」

不意に口から出たのは、今月から新しく部隊を立ち上げる知人の事。
十年前に起こった二つの事件の内の一つで、実質的な被疑者だった少女。
……今は二等陸佐まで昇進し、数年前から自分の部隊を作ろうと走り回っていた。
少女の夢はもう少しで叶う。部下達は自分や少女の知り合いが中心だと少女から聞いている。

「初出動で見極めさせて貰おうじゃねーか、はやて」

だからこそ、初めての出動が重要になってくる。
普通の部隊と違って、周りは気を許せる知り合い達ばかり。
故に、一番最初の出動をレンはどれよりも重視していたのだ。
……それは全て、部隊運用が上手く行くようにと願ってこその事。

「さってと、そろそろ行かないと怒られそうだ。行くぜ、ラグナロ

ク」

『分かってますって』

深い意味を込めた独白。

それから殆ど間を置かずに、レンは毛布の中に埋もれていたラグナロクを取り出すと。

首にぶら下げて、そのまま部屋を出て行く。

……そう遠くない未来に、大きな事件が再び起こる事を希少技能（レアスキル）で予測しながら。

（第一話へ続く）

第一話：機動六課始まりの日（前書き）

ようやく、Ｓｔｒｉｋｅｒｓ本編に入って行きます。
尚、オリジナル多めで行きますので、アニメとは若干違う展開になる場合がありますので、何卒ご容赦ください。

……それでは、どうぞ。

第一話：機動六課始まりの日

――――正確な座標を確認する事すらされていない無人世界。

見渡す限り一面に広がる荒野に、水分を全く含まない乾いた風が吹く。

……風は地面を覆っていた砂を共に吹き飛ばし、砂によって隠れていた“何か”を外気に曝させた。

半分以上が砕け、辛うじて車輪と分かる“何か”がついた靴のようなもの。

真ん中で真っ二つに折れ、更には所々にヒビが入って全く原型を留めていない剣と槌。

砂埃を被り、元々は白かったその身を微かな灰色混じりの白色に変化させた、機能が一切停止した銃。

大量の弾薬が入ったマガジンと共に、先端部分だけが僅かに残された赤い宝石が施されている金色の杖。

亀裂が至る所に入っているが、搭載されている機能はまだ一部が辛うじて停止していない片手剣。

……そして。一番原型を留めているものの、端から端まで至る所に亀裂が生じている黒色の長い槍。

風と砂埃に曝され地面に埋もれかけている、嘗て反逆者達が手にと

って戦った相棒の残骸達。

砂嵐が吹き荒れて、視界の効かない荒野で辛うじて動くことが確認出来る、無数の人影。

その先頭に立ち、後を歩く者達を引っ張っているのは――――。

しかし、直前になって砂嵐はより激しさを増して吹き荒れ、数メートル先をも見えなくするほどに濃くなる。

……しばらくして砂嵐が止むと。そこに人影と、朽ち果てた機械の残骸達は無く。

ただ、何かが墜落したような大きなクレーターだけが残っていた……。

――――――――――――――――――――

――――四月下旬。
ミッドチルダ中央区画湾岸地区の一角。
古代遺物管理部、機動六課隊舎。

「うぅ～、緊張する～っ……」

広い隊舎の長い廊下を歩く、一人の少女の姿があった。
地面に届きそうな長いツインテールの黒髪に、琥珀色の瞳。
服装は一般局員とほぼ同じであるが、襟元を飾るのはネクタイでは

なく琥珀色のリボン。
そして、胸元のポケットには限られた者しか着用を許されない、翼の形をしたピンバッジ。
首からは、竜の牙をモチーフにした金色のペンダントをぶら下げている。

『マスターサクラ、落ち着いて下さい。もうすぐ部隊長室ですよ？』

「だってお姉ちゃん以外は、ほぼ三年ぶりなんだよ？　緊張しない方がおかしいって～」

『そんなものなのでしょうか？』

「そういうものなの～！」

ペンダントから発せられる機械音声。
それに少女は頬を膨らませて答え、尚も歩き続ける。
……彼女の名前は、サクラ・Ｔ・ハラオウン。
本局航空隊に所属する空戦魔導師で、次世代のエースと名高い逸材。
若手でも一番の成長株と期待される程の実力を持っており、上層部からの評価は高い。
ただ、その事実を本人がよく理解していないのが唯一の難点と言えそうな難点だが……。

『とか言っている間に、もう部隊長室ですよ？』

部隊長室に到着した事をサクラのデバイス……アルタイルが告げる。
サクラが驚いて辺りを見回すと、確かに部隊長室の扉の前まで来ていた。

「ちょっ……！　アルタイル、服とか髪とか乱れてないよね！？」

『部屋で確認した時のままです。問題ありません』

「良かったぁ……。さてと、それじゃ覚悟を決めて……」

あたふたしつつも服装と髪型に乱れが無い事を確認し。

サクラは一度、深く深呼吸をしてから扉の脇にあるブザーを鳴らした。

『どうぞ～』

しばらくして、中から声が聞こえた。

言葉のアクセントが少し異なる事から、恐らくはやての声であろう。

「失礼します」

声を聞き、サクラはボタンを押して部屋の中へと入る。

……と、中には部隊長のはやて以外にも、既に二人の先客が居た。

栗色の髪をサイドポニーテールで纏めた女性、高町なのは。

金色の髪を先端付近のリボンで纏めた女性、フェイト・Ｔ・ハラオウン。

『え！？』

サクラが部屋へ入ってきた瞬間。

はやても含む、部隊長室に居た全員が驚きの声を上げた。

驚く一同を尻目に、背筋をきっちり伸ばして直立不動の体勢になったサクラは、敬礼。

そして、やや上ずった声ではやて達を見回してからイメージしてい

た言葉を紡ぐ。

「サクラ・T・ハラオウン二等空尉、本日より機動六課に出向となります。よろしくお願いします！」

『デバイスのアルタイルです。マスター共々、よろしくお願い致します』

……しかし、サクラが喋り終えてもはやて達は固まったまま。
部屋に入って来た時の表情そのままで、サクラを見つめている。
そんな四人を見て、徐々に思考が冷静を取り戻してきたサクラは、慌てふためく。

「あ、あれ……！？　私、どこかおかしかったですか！？　えと、えと、えと……！」

「あー、違う違う。そう言う事やないよ、サクラ」

一人で勝手にあたふたし始めたサクラを三人の中で、いち早く我に返ったはやてがなだめる。
なだめられたサクラは、若干涙目になりながらはやてを見つめた。

「私ら皆、サクラが六課に来るって事実をまだ受け止めきれてないんよ。な？」

「うん。レンさんからは、とっておきの人材を集めてくるとだけ聞いてたんだけど……」

「まさか、それがサクラだったなんて思って無かったもんね」

はやての問いに答えるなのは、フェイト。
三人それぞれの言葉を聞いたサクラは、自然に笑みがこぼれ。
笑っていた――――所で、ある一つの疑惑に辿り着いた。
本来ならば伝えられていなければならない事が、伝えられていないかもしれないと言う事に。

「あの、お兄ちゃんはそれだけしか言ってませんでした？　具体的な人数とかは……」

「私は何も聞いてないけど……。はやてちゃん、フェイトちゃんは？」

「何も聞いてないよ。と言うより、サクラが来る事自体初めて知ったようなもんや」

「同じく。具体的な人数とかは、全く……」

サクラの問いかけに、三人から返って来た答えは皆同じ。
それでサクラは確信した。やはり、伝えられているはずの事が伝えられていない。
自分を六課に誘った張本人は、創設の中心者である三人に何を伝えていたのだろうか……。
ともかく。伝えるように言われていた事を伝えるべく、サクラは口を開く。

「私に加えて後四人、とっておきの戦力が来る事になっているんですけど……」

『四人！？』

サクラの“四人”発言に、はやて達は一斉に驚いた反応を見せた。
やはり何も伝わっていなかったようだ。思わず、口に手を当てて軽く笑うサクラ。

「その四人は引き継ぎが間に合わないそうなので、五月中旬の合流になるそうです」

「私が先に来たのは、それを確認する為だったんですけど……。その様子ですと、聞いてませんでした？」

ここまでの説明で、はやて以下三人はようやく先程の問いかけの意味に気付いたらしく。
全員が納得したような表情を浮かべた……ように、見えたがはやてだけは違った。
他の三人が気付いていない事を悟ると。直ぐにサクラへと質問を投げ掛ける。

「そう言えばサクラ。四人来る言うてたけど……誰が来るのか、分かる？」

「誰が来るかはまだ秘密です。ここで話すと、面白くないですし♪」

問いかけに、サクラは意地の悪そうな笑みを浮かべながら答えた。
教えてよ～と言うなのはの言葉にも、全く動じず。

「でも、皆さんが知ってる方ばかりなので大丈夫だと思いますよ♪」

そうとだけ答え、誰が来るか明確な事は話さずにはぐらかすばかり。
……と、サクラは室内の時計に目をやり、時間が差し迫っている事を確認。

ドアに向かって半歩下がると、直立不動で敬礼をしてから口を開く。

「それでは、ロビーでお待ちしてますね。きっと他の皆さんも待っていますよ♪」

そう言い残して、サクラは部隊長室を後にした……。

因みにこの後、サクラが廊下で出会い頭にグリフィスとぶつかり。

お互いに文句を言い続けて、六課の結成式の開始が遅れたのは余談である。

――――――――――――――――

隊舎のロビーに全員を集めて行われた、機動六課結成式は無事に終了。

その後、ホールに集められた隊員達はそれぞれの持ち場へと散って行き。

前線部隊の新人フォワードは、初日から早速なのはの教導を受ける事になった。

「本来なら、私もなのはさんの教導を受けるべきなんだけどね～」

『マスターサクラ、貴方は既に教官資格持ちでしょう?』

「私はまだまだだから。なのはさんの教導から、少しでも学べる事があればいいなって」

その中でサクラだけは、まだ他の隊員が六課に合流してない事もあってか。

しばらくは交替部隊と共に任務に出たり、隊長陣が不在時の留守を預かる役目を引き受けた。
交替部隊は夜勤がメインである為、軽い顔合わせを終えてからは夜まで実質的にフリー。
夜まで暇を潰すべく、サクラはなのはの教導を受けているであろう、フォワード達の様子を見に来ていた。

『四人とも、とても良い動きですね』

「だね。あれがデータ収集用の機体だとは思えないぐらいだよ」

ディスプレイに映し出される、フォワード四名の動きを見つめるサクラ。
まだまだ荒削りながらも、育て上げれば立派なストライカーに化ける可能性を秘めた四人。
四人に支給されているのはデータ収集用の仮機体とは言え、既に動きは同期の者達より数段飛び抜けている。

「これならますます、私は教導をやらない方が良いかも……」

「何だ、サクラは教導やらねーのか？」

聞き覚えのある声に、声のした方向へと視線を向けたサクラ。
その視線の先に居たのは、ぱっと見は小学校低学年に見える赤毛の少女。
だが、その身からは数々の激戦を潜り抜けたオーラを放つ、鉄槌の騎士ことヴィータだった。

「ヴィータ副隊長。……私にはまだ早いですよ。教官資格も、取ってまだ半年ぐらいですから」

『それに、マスターサクラに教導をやらせたらまず間違いなく、フォワード達は三日ぐらい動けなくなるでしょうね♪』

「アルタイル！？　そんなでたらめ言わないでよ！！」

『じゃあ、初めての教導の時に教え子達を全員、丸一日以上動けなくさせたのはどこの誰でしょうかね～？』

「……私です」

「ははは……。お前達も結構、大変なんだな……」

サクラとアルタイルの息の合った漫才（と呼べるのだろうか？）に、ヴィータは渇いた笑いを浮かべるのみ。

時々、訓練施設の方から聞こえる爆発音や怒声を聞きつつ、サクラに問いかけるヴィータ。

「んで、他の連中はどうしたんだ？　合流が遅れるって言ってたけどよ」

はやて達と違って、ヴィータやシグナムは既に誰が六課に来るのかを知っている。

故にサクラのみが来たと聞いた時、真っ先に疑問を抱いたのはヴィータだった。

「実は昨日、ようやく長期任務が終わったばかりで……。後処理に時間が掛かりそうなので、私だけが先に来たんです」

『実際、マスターサクラも合流出来る状態ではありませんでしたけ

どね』

それに対し、サクラは少し言い辛そうに答え。
続けてアルタイルが、さらりと真実を告げてしまった。
だが、ヴィータは特に驚く素振りも見せず、しばらく考えた後に返事を返す。

「長期任務……。あぁ、“ロギア組み込みデバイス”の長期耐久試験だったか？」

「そうです。一応、アルタイルにも実験機にはなって貰っているんですけど……」

『私は“もう一つのシステム”の実験機も兼ねているので、そこまで仕事は多く回って来ませんでした』

「それも若干ですけど、早く任務から解放された原因かもしれませんね」

問いにサクラとアルタイルはそう答え。
空中に現れたコンソールのキーボードを叩き、ディスプレイを一つ表示させる。
ディスプレイには、第９７管理外世界で使われている言語、“英語”に似た文字の他。
何かの機械の構図と思わしきイラストが複数枚、大量のミッドチルダ語と共に載せられていた。

「これか……。見た所かなり大変そうだけどよ、大丈夫なのか？」

「その辺は抜かりなく。体調と予定はきっちり自分で管理してます

から」

ざらっと目を通したヴィータの問いかけに、きっぱりと言い切って返すサクラ。
その瞳には、全く揺らぐ事の無い自信と信念が宿る。

『マスターサクラ、そろそろ荷物が届く時間では？』

「え？　あぁ、そうだった！　ヴィータ副隊長、すみませんが失礼しますっ！」

……訂正。
宿っていたのだが、アルタイルの一言で直ぐに掻き消え。
今の今まですっかり忘れていた事を思い出し、ヴィータに向かって敬礼。
そして、そのまま直ぐに駆け出して隊舎の方へ一直線に向かう。

「お、おう。気を付けろよ～」

「分かってます！」

ヴィータの言葉に答え、サクラは隊舎に向かって物凄い速度で走り去って行った。
……サクラが去ったのと入れ替わるようにして、ヴィータの元に一人の女性がやって来る。
桃色の長い髪をポニーテールに纏め、ヴィータと同じ制服を身につけている十代後半の女性。

「ここに居たか、ヴィータ」

「シグナムか……。サクラとすれ違わなかったか？」

「あぁ、今さっきな。何やら、かなり急いでいたように見えたが」

ヴォルケンリッターのリーダーで、数多の戦を古き時代から潜り抜けて来た騎士。

“剣の騎士”と言う二つ名を持つシグナムは、ヴィータの問いに淡々と答えた。

「荷物の搬入だってさ。サクラはまだ、やってなかったみたいだな」

「……そうか」

一言だけ言葉を返し、シグナムはヴィータと共に視線を仮想プログラムの街へ向ける。

……二人の視線の先には、数分前からガジェットを追いかけ続けるフォワード達の姿が。

「……お前はやらないのか？」

「四人とも、まだよちよち歩きのひよっこだ。あたしが教えるのはまだ先だよ」

そうだったな、とヴィータの言葉にシグナムは答え。

視線を今度は自身の上に広がる青空へと向けた。

「しかし、サクラを教導に参加させなくて大丈夫なのか？」

「大丈夫さ。サクラはもう教官資格を持ってるし、それに……」

「それに？」

シグナムの二度目の問いかけに、ヴィータは直ぐに言いかけるも口をつぐみ。

少しだけ、間を開けて。視線をシグナムの方に戻して、言おうか言わぬかしばらく迷った後に……。

「――――何てったって、“アイツ”が直接指導してるからな」

そう、答えた。

――――――――――――――――

「ぶえっくしっ！！」

同時刻。航海中の次元航行艦、ノクターンの執務室にて。

本局へ帰還したと同時に提出予定の報告書類の作成に、人々が追われている中。

この部屋の実質的な主であるレンは、作業の最中に派手なくしゃみをぶちまけた。

『寝ぼけてて、武道館で歌ってる夢でも見ましたか？』

「……ラグナロク。お前はどういう考えしてんだ、アホ」

資料を纏めつつ、ラグナロクに容赦の無い鋭いツッコミを入れて見せたレン。

しばらくはキーボードを叩きながら、ディスプレイをじっと見つめ

続けていたが……。

「うっし、こんなもんかな……」

そう呟いた所でディスプレイを目の前から消し、続いて別のディスプレイを呼び出す。
ハッカー顔負けのタイピング速度でキーボードを叩いて打ち込み、やがて画面は黒一色になる。
……しばらく間を置き、黒一色だった画面に白い文字が徐々に浮かび上がってきた。
文字が全て表示されるのを待ち、レンは再びキーボードを叩き。そして一言。

「全ての始まりは無にあらず。全ての始まりは等しく一より、無限の可能性へ」

【……パスワード、及び声帯検査確認を受理。アクセスユーザをレン・T・ハラオウンと認証】

直後、ディスプレイからは機械音声が発せられて。
間を置かずに画面には次々と文字が浮かび、瞬く間に画面を埋め尽くす。

【只今より、プライベートチャンネルにおける会話を許可します】

再び機械音声が聞こえると同時に、画面を埋め尽くしていた文字は消失。
それに代わって、今度は強面の男性の顔がディスプレイに映し出された。

【久しぶりだな。“例の計画”は順調に進んでいるか？】

「えぇ、お陰さまで抜かりなく。むしろ、順調に進み過ぎてるくらいです」

【先日、お前の元へ送ったデータはどうなった？】

「かなり助かりましたよ。お陰で、俺のデバイスにも対戦闘機人用データを組み込めました」

『高濃度のＡＭＦ状況下でも、通常の九割まで稼働出来るようになりましたからね』

【そうかそうか。しかし、まさかこんな所で儂のデータが役に立つとは】

会話をしつつ、レンはキーボードを叩きながら別のディスプレイにデータを纏め。

纏めたデータを圧縮して、別のデータと一緒に一つのフォルダに再度纏めると。

宛先を指定した後にフォルダを送信。その後に、フォルダを綺麗さっぱり消し去った。

「参考までに、データ組み込み後のシュラウドとラグナロクの戦闘データを送っておきますね」

『このデータがあれば、もしかしたら他の六課メンバーのデバイスにも組み込めるかもしれません』

【分かった。儂もセシルやユーリ達と、これ以上改良出来ないかど

うか話し合ってみよう】

「お願いしますよ、“レジアス中将”」

【任せておけ。こっちから接近できる極限まで接近してみる】

男性……レジアスの言葉を最後に、画面はブラックアウト。
ディスプレイは何も映し出さなくなり、それを確認してからレンは大きく息を吐いた。

――――あの人との会話では、どうも変に緊張してしまう。

心の片隅では意識するなと思っていても、結局は意識して妙に緊張する。
レジアスとは今までに幾度と無く、通信や直接会って話はしていた。
勿論、自分の我儘に危険を冒してまで付き合ってくれているので、感謝はしている。
だがしかし、自分の全てを曝け出せる存在としてはレンはまだ、レジアスを信頼しきれていない。
……そう言う意味では、自分はまだ師匠である朱音の足元にすら及ばないのだ。

「ったく。最近の俺はどうかしてるぜ、全く……」

今の事態を招いた自分自身に悪態を付きつつ。
レンは別のディスプレイを呼び出し、素早くキーボードを叩いて文字を入力して行く。
……幾つものデータが現れては消え、現れては消えを数秒おきに繰り返す。

「こんな事をして本当に対抗策と成りえるんだろうかねぇ……？」

『仕方ないですよ。これが今の所では最善の結果なんですし』

だよなぁ、とレンはラグナロクの言葉に答えてからキーボードを叩く動作を止め。

今度はタッチパネルを操作し、別のディスプレイを呼び出した。

呼び出されたディスプレイには、機械の設計図のような物が幾つも描かれており。

それらを全て組み合わせると、最終的には杖と大型バイクのような物になる仕組みに見えた。

『しかし、マスターもこんな物をよく作りましたね～？』

「“エルシウス”の方か？　それとも、“インフェルノ”か？」

『両方ともです。特に“エルシウス”は、常人には使いこなせませんよ……？』

「両方とも俺が使うから心配ねぇよ。お前もシュラウドも、そろそろフルメンテとフレーム交換の時期だしな」

言葉のやり取り。しかし、レンはキーボードを叩く手の動きを止めず。

ディスプレイ上で徐々に出来上がって行く、杖と大型バイクの設計図へと視線を向けたまま。

『そういえば、もうそんな時期ですね……って、まさかそれを見越してロールアウトを早めたのですか？』

「当たり前だろ？　お前とシュラウドが一度にメンテ入りしたら、俺が戦えなくなっちまう」

『ですよね……』

ラグナロクの問いかけにレンはそう答え。
ディスプレイに表示された無数のファイル群から、一つのファイルを選んで起動させる。
……それは、レン自身が組み上げた最終チェック用のプログラムだった。

【これより、“エルシウス”と“インフェルノ”。双方のロールアウト前、最終チェックを行います】

プログラムは順調に起動し、指定された手順に従って最終チェックを開始する。
だが、プログラムだけでは最終チェックを終える事は出来ない。
何せ最終チェックは、万にも及ぶ莫大な項目を僅か十五分ほどで全て確認するのだ。
コンピュータの自動制御だけでは、到底不可能な領域である。

「……最終チェックは抜かりなく、な。お前の実質的な後継機になる訳だし」

『お任せ下さい。万全の状態でロールアウトしてみせます』

その言葉を最後に、ラグナロクは言語知能を一時的に停止して、プログラム制御にＡＩ機能の全てを注ぐ。
少し経ってから作業が順調に進んでいる事を確認したレンは、通信の為にコンソールパネルを開いた。

通信先は、嘗て自分が出向先として僅かな間だけ居候させて貰った部署。
そして、デバイスマスターの資格を取得する際には、手取り足取り教えて貰った場所。
……しばらく呼び出し音が響き、やがて若干の雑音と共に聞き覚えのある声が聞こえた。

【はい、こちら本局第六デバイス開発室……って、レン執務官長じゃないですか！】

「久しぶりだな、ジュン。元気でやってたか？」

【勿論ですよ！　お陰様で上手くやれてます】

通信に応答したのは、十代後半か二十代前半の青年。
レンは青年……ジュンの言葉に、笑顔で答えた後に直ぐに表情を引き締め。
手元にあったデータとジュンの顔を交互に見つめながら、問いかけた。

「前々から打診してた、シュラウドとラグナロクのフルメンテナンス。……明後日からで行けるか？」

【お任せ下さい。今から予定を調整して、何とか開けておきます！】

「……よし、じゃあ任せたぞ。明後日の十時ぐらいにそっちに行くからな」

その会話を最後にディスプレイからジュンの姿は消えて、再び部屋には静寂が訪れる。

椅子にもたれかかったレンの耳に聞こえるのは、最終チェックプログラムが発するＳＥ音だけ。
……天井をしばらく見上げ続けていたレンは、視線を正面に戻すとぼそっと一言。

「最悪の結果だけは防がないとな……。“管理局滅亡”と言う――」

だが、レンが呟いた言葉は最後までは聞こえる事無く。
途中でプログラムが全てのチェックを完了した旨を伝える音声によって、掻き消された……。

（第二話へ続く）

第二話：エース・オブ・エース（前編）（前書き）

投稿が大幅に遅れました……。
しかも、試験直前のこの時期までずれ込むとは予測出来ませんでした。

と、それはさておき。第二話の前編をお楽しみ下さい。

では、どうぞ！

第二話：エース・オブ・エース（前編）

時は流れて、午後の機動六課隊舎。
少し遅めの昼の食事休憩を終え、午後の訓練の時間になっていた。
しかし、肝心のフォワードメンバーの四人は仮想訓練施設の外。
仮想訓練施設に再現されたビル街の道路には、スバル達の代わりにサクラの姿があった。

「それじゃあサクラ、張り切って行くからね～！」

サクラの視線の先では、バリアジャケットを身に纏ったなのはがレイジングハートを構えている。
その瞳は、未知の実力の持ち主と戦う好奇心に溢れている……ように、サクラには見えたとか見えなかったとか。

「あははは、お手柔らかにお願いしま～す。……えーと、どうしてこうなったんだっけ？」

『私に聞かれましても……』

張り切るなのはを見て、困惑した表情を浮かべるサクラ。
そして、主の問いにも一言答えて、押し黙ってしまうアルタイル。
サクラはどうしてこうなった、と言う言葉がピッタリ合いそうな表情をしている。

「仕方ないか……。アルタイル、終わったらフルメンテになるかもしれないけど、大丈夫？」

『……はぁ、分かりました』

悲壮感漂う表情で告げたサクラの言葉に、アルタイルはしばらくの沈黙の後に言葉を返した。

……と言うのも、こうなってしまったそもそもの原因は、他ならぬサクラ自身の失言にあるのだ。

決して、なのはがシグナム病（要するにバトルマニア）になってしまった訳ではない。決して。

話は、午後の訓練が始まった少し後まで遡る――――。

――――――――――――――――

朝からぶっ通しで訓練をし続け、僅かばかりのお昼の休憩を挟んだ後の午後の訓練。

まだまだ動きに固さが見られるものの、最初よりかは幾分か良い動きをするようになったフォワード陣。

そんな四人の姿を、サクラはビルの屋上でなのはから貰ったモニターを用いてチェックしていた。

「流石、なのはさん達が探し出した子達だね」

『動きから直ぐに固さが抜けたのも、元々の素質が良いからでしょう』

スバル、ティアナ、エリオ、キャロ。

新しく入った四人の新人達は、いずれも同年代の者達と比べれば、飛び抜けた素質を持っている。

抜群の突破力と機動力を併せ持ったスバル。

多彩な戦術と非凡な頭脳で、相手を翻弄しながら戦うティアナ。
スピードを武器に戦場を駆け抜けるエリオ。
竜召喚師としての強大な力と才能を持つキャロ。
まだまだ荒い部分もあるが、育てればまず間違いなく一級のストライカーになる逸材ばかり。
このような人材を集めてくるあたり、なのは達は凄いと思わずにはいられないサクラであった。
「てかそもそも、スバルとティアナを推薦したのは訓練校が同じだった私――――」
『マスター！　前、前を見て下さい！』
「え！？」
サクラが言いかけた所で、アルタイルが警告を発した。
慌てて視線を前に向けると、既に目の前まで橙色の弾丸が迫って来ているではないか。
咄嗟に右手を出し、魔力を集中。直後に大きな青色の盾がサクラの目の前に出現する！
「フォース・シールド！」
――弾！
弾丸は盾に直撃したものの、盾の強度が弾丸の威力を上回ったらし

く、弾丸は一瞬で消滅。
後から弾丸が飛んで来ない事を確認すると、サクラは盾を消して右手を下ろした。

「すみません、大丈夫ですか!?」

『サクラ、大丈夫～?』

一息ついていると、直ぐにティアナから。
続いて、モニターを通じてなのはから無事を確認する言葉が投げかけられる。

「あ、はい。こっちは大丈夫で～す」

サクラはそう答えると、それまで展開していたモニターを閉じ。
足に力を込めて跳躍して、ビルの前に集まっていたなのはとフォワード陣の前に降り立った。
……勿論、着地の際にはきちんと魔法を使っているが。

「ごめんなさい……って何だ、サクラか」

「ティアナ、それは流石に酷くないかな!?」

開口一番に謝りかけたが、サクラの顔を見た瞬間に一瞬で態度を変えたティアナ。
サクラは真っ先に態度を変えた事にツッコミを入れたが、涼しい顔でスルーされてしまった。

「あはは、サクラも相変わらずだね～」

「そっくりそのままその言葉を返すよ、スバル。ティアナにまだ迷惑掛けてるんじゃないの？」

「う、それは……」

ティアナに対しては、圧倒的完敗に終わったものの。
スバルに対してはと言うと、逆に相手を黙らせて（口論の）勝利を手繰り寄せたサクラ。
どれもこれも、久しぶりに会う二人を前にした照れ隠しのようなもの。
それは、少しの間の付き合いだったスバルとティアナでも、よく感じ取れる事であった。

「スバルさんとティアナさん、この方とはお知り合いですか？」

「お二人とも、とても仲が良いように見えるんですけど……」

「私も気になるな。サクラとスバルとティアナが、まさか知り合いだったなんてね～」

エリオ、キャロ、なのはからの三者三様の問いかけ。
対する三人はと言うと、これまた三者三様の答えを返した。

「訓練校に居た時に一緒だったんです。ね？」

「そうです。ただ、サクラはさっさと出て行っちゃったんですけどね」

「あははは……」

スバルとティアナの容赦ない言葉に、乾いた笑い声を上げるだけのサクラ。
事実か事実じゃないかと言えば、この反応だと明らかに前者であろう。
実際、航空隊の中では若手ナンバーワンと評される程の実力を持っているサクラだ。
訓練学校をさっさと出て行ける程の実力を持っていても全く不思議ではない。

「サクラ、今更だけどエリオとキャロに自己紹介、した？」

「あ、そういえばちゃんとした自己紹介をしてませんでしたね……」

なのはの問いかけに、はっとなってサクラはバツの悪そうな表情を浮かべた。
しばらくして、エリオとキャロの方に向き直ると。遅れちゃってごめんね、と呟いてから。

「今日からしばらく、訓練や出動の時にお手伝いをさせて貰うサクラ・T・ハラオウンです。よろしくね♪」

そう、告げた。
慌てて同じように自己紹介をしようとするエリオとキャロを手で制し。
二人の事は知ってるから大丈夫だよ、と呟いてからなのはの方を見て言葉を紡ぐ。

「本当は私も前線部隊の所属なんだけど……。諸事情で、今は隊長・副隊長達の下についてお手伝いをしてるんだ」

「だから、しばらくは私だけじゃなくてサクラにも訓練を見て貰う事もあるかもね」

サクラが呟いた言葉をなのはが継ぐ。
それに一同は目を丸くするも、大して驚かずに続けてサクラは話す。

「これでも私、教官資格持ちだからね。ちゃんと正式な形で教導は出来るんだから」

その言葉にスバルを始めとするフォワード陣は目を丸くした。
無理も無い。スバルとティアナに至っては、自分と同年代の少女が既に教官資格を持っているのだ。
なのはと言い、サクラと言い、これが生まれ持った才能とでも言うのだろうか。

「じゃあ、今日からサクラも教導をしてくれるの？」

「今日はまだね……。まだ身体も温めてないから」

スバルの問いにサクラは苦笑いしながら答える。
……と、その時だった。なのはの口からとんでもない発言が飛び出たのは。

「じゃあ、私と模擬戦やってみる？」

「……はい？」

あまりの発言にサクラはしばし沈黙。そして直ぐに無理ですよ、抗議をしたのだが……。
なのはの強い姿勢に押されて、最終的には渋々承諾する事になって

しまうのは余談である。

――――――――――――――――

で、今に至ると言う訳だ。

「コンディションはまぁまぁって所かな。うん、これなら大丈夫そうだね」

兄と姉に憧れて伸ばした黒いツインテールが、風に靡く。
苦節八年。ようやく腰の辺りまで来たが、まだまだ兄と姉には追いつけない。
……というより、あの二人に追い付くことはまず無理であろう。
二人とも髪を全く切ろうとはせず、むしろ精力的に伸ばす方であるのだから。

「アルタイル、モード１ｓｔ『アヴィオール』で行くよ」

『了解。Ｎｏ．１、ヴァジュラ。スタンバイオッケーです！』

「スタート・アップ！」

瞬間、サクラの身体が光に包まれる。
コンマ数秒で光は晴れたが、そこに居たサクラの服装はそれまでと異なっていた。
黒一色の身体全体を包み込める大きさの外套と、同じ色で白いラインが入ったシャツとスカート。
サクラが普段から好んで着る衣服によく似たデザインのバリアジャケットだ。

右手には、レイジングハートの先端をバルディッシュに取って付けたようなデザインのデバイスが握られていた。
……モード１ｓｔ『アヴィオール』のＮｏ．１、ヴァジュラへと姿を変えたアルタイルである。

「そういえば、サクラとこうして戦うのは初めてかな？」

「そうですね。今まで何だかんだで手合わせをした事はありませんし」

なのはとサクラ。二人の距離は、五十メートルを余裕で超えている。
それでも言葉が通るのは、二人の間を遮る物が何も無いからだ。

「それじゃ、そろそろ始めようか？」

「そうですね。……サクラ・Ｔ・ハラオウン、行きます！」

なのはの言葉に返事をして、自ら名乗りを上げたサクラは次の瞬間。
――――両足に力を込め、上空へ飛んだ。

「えっ！？」

流石のなのはも、いきなりの行動に思わず声を漏らす。
……が、気付いた時にはサクラは既に、上空高くへと跳躍していた。

「最初から飛ばして行きますよ！」

言葉と共に、アルタイルのリボルバーマガジンが回転。
薬莢が一発、二発……。合計で三発、宙へと放出される。
同時に、強大な魔力がアルタイルの先端に集束していく……！

「スピリチュアル……！」

技名は途中まで。だが、途中で区切った言葉が集束を更に加速させ。瞬間的にではあるが、魔力が集束する様を“視界から消して”みせた。

“視界からは消えた”ものの、“魔力反応自体はまだ残っている”と言う状態。

「気をつけて……。絶対に何かを仕掛けてくるはずだから」

『Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ』

レイジングハートに注意を促しながらも、既に次の攻撃が何であるかをなのはは読んでいた。

……スピリチュアルブラスター。サクラの十八番である、高速・高威力の集束砲撃。

彼女の師匠、レンをも越える実力の持ち主、生駒朱音直伝の技だ。

――――防ぐか避けるかはサクラの出方次第、かな。

そう思案し、なのはは回避・防御のどちらにも対応出来るようにレイジングハートをぎゅっと握り直す。

それとほぼ同時にアルタイルの先端に集束していた魔力が再び姿を現し。そして――――。

「クラスター！！」

「――――っ！」

告げられた名前と飛んで来た攻撃に、なのはは声にならない叫びを上げた。
咄嗟にサクラから距離を取って、レイジングハートを構え直した直後。
上を見上げたなのはの視界に映ったのは、大量の弾丸……否。大量の“集束砲”！

拡散した大量の集束砲は、四方八方から正確無比な弾道でなのはを狙い撃つ！
……しかし、なのはは防がずに回避する事を選択した。
集束砲が被弾するギリギリまで引きつけてから、一気に急上昇。
執拗に追尾してくる集束砲を振り切り、眼下に居るサクラに向けてレイジングハートの先端を向ける。

「アクセル！」

『Ａｃｃｅｌ　Ｓｈｏｏｔｅｒ』

「シュート！」

先端に魔力が集中。しかし、次の瞬間には魔力は既に無数の弾丸として放たれていた。
桃色の魔力スフィアは放物線のような軌道を描き、眼下で浮遊しているサクラへと迫る！
だが、サクラも負けてはいない。瞬時に弾道を予測すると、巧みに身体を捻って全てを回避。
そして右手に持つアルタイルに指示を飛ばす。

「カートリッジ！」

『ロードカートリッジ！　ショックウェーブパルサー！』

言葉と同時に、空薬莢……魔力を込め終えたカートリッジが宙へと放出される。
そしてアルタイルの先端には魔力が集中。それを確認したサクラは、アルタイルを両手で構え直した。
空中の次々と出現させる山吹色の円形の魔法陣を蹴りながら、慎重になのはへと狙いを定め……。

「ファイア！」

――――放ってみせた。
耳が破裂するような……とてもではないが、集束砲から発せられたとは思えない轟音。
しかし、それは紛れも無くサクラが放ったショックウェーブパルサーから発せられたもの。
アルタイルから魔力の残滓を零しつつ、集束砲はなのはへと迫る……！

「防いで！」

『Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ！』

だがなのはは慌てる事無く、右手を身体の目の前へ突き出して桃色の円形の盾を展開。
その数瞬後に、ショックウェーブパルサーが被弾！　なのはの姿は煙に包まれる……。
が、煙は直ぐに晴れて、なのはの無事な姿をサクラに認識させた。

「うっそ……」

『あのタイミングで防がれるとは……』

サクラとアルタイルは驚き。
しかし、それは一瞬。次の瞬間には、アルタイルを構えて再び上昇。
同時にサクラの周囲には、槍の形を模した山吹色の魔力スフィアが展開する……。

空薬莢がアルタイルから放出される度に、魔力スフィアは数を増やす。
その数は十、百……。いや、千でも恐らくは物足りないと思われる。
丸で空を覆い尽くすかのようにスフィアを増やし続けるサクラ。
それに何かを意図を感じ取ったのか、なのはもレイジングハートを構え直した。

「そういう事なら、私だって……！」

桃色の魔力スフィアがなのはの周囲に展開していく。
サクラが作り出した山吹色の槍と同じように、数は十、百、千……と徐々に増す。
数メートルの間を経て、大量の魔力スフィアを従えて対峙する二人。
いつ、二人がスフィアを発射してもおかしくない状況になりつつあった。

「アクシムランサー！」

「アクセルシューター！」

やがて、均衡が破られる。スフィアを展開する二人の言葉によって！
同時に二人が展開する魔力スフィアが、輝きを増していくではない

か。

「ファイア！」

「シュート！」

二人は同時に叫び、魔力スフィアを発射。
同時に放たれた桜色と山吹色の魔力スフィアが、二人の間でぶつかり合う！
威力は全くの互角らしく、ぶつかり合ったスフィアは相殺されて消えて行く。
大量のスフィアの制御に意識を割きつつも、サクラは次の手を既に打っていた。
密かにアルタイルからブラスタービットを分離。そして、魔力をチャージしつつなのはの上空へ。

やがて、魔力スフィアが相殺されて殆ど消滅した隙を見計らい。
サクラは上空に潜ませていた、ブラスタービットに指示を飛ばす！

「シューティングスター！」

ブラスタービットから放たれたのは山吹色……ではなく、“どす黒い色をした”極太の集束砲撃だった。
……はたから見れば、丸で集束砲自体が闇の力を持っているかのようにも見える。が、実際はこれで正しい。
シューティングスター。“純粋なる闇の集束砲撃”にて、サクラが唯一独自に編み出した集束砲撃。
――――そして、サクラが行使出来るミッド式魔法の切り札でもあるのだ。

「っ！」

『Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ！』

大規模な魔力反応で、集束砲が放たれた事を一瞬で悟ったなのは。
同時にレイジングハートがプロテクションを展開。集束砲を防ぐ体勢に入った。
それを見たサクラは、アルタイルを自身の右側へと払うように振るって追撃をかける！

「ブレイク！」

どこからともなく現れた、魔力集束を既に終えたもう一つのブラスタービット。
ソレはサクラの言葉に呼応し、もう一つのビットに続いて追撃とばかりに新たに集束砲を放つ！

これには流石のなのはも顔をしかめ……たが、直ぐにそれは笑みへと変わる。
展開していたプロテクションを解除。その刹那に急加速し、シューティングスターを回避。
サクラの更に上空へと回り込むと、カートリッジをロードしたレイジングハートに魔力を集束させ始めたではないか。

「まさか避けられるなんて……。とにかく、直ぐに回避しないと……！？」

回避された、という現実にしばし驚いたものの。
徐々に集まる強大な魔力を前に、回避行動を取ろうとしたサクラ。
……が、その場を動こうとした瞬間。ようやく、自身の身体の自由

を奪われている事に気付いた。

「バインド！？」

『それもかなり強力ですね。どこまで見越していたのでしょうか……』

「そんな呑気なこと言ってないで、解除手伝ってよ！？」

『これは私でもマスターでも無理ですね。諦めて一撃を貰いましょう』

桜色のバインドで両手両足を拘束されているサクラ。
何とか脱出を試みようとするもアルタイルの言う通り、どうしようも出来ない。
その間にもなのはが構えるレイジングハートには、徐々に魔力が集中して行き。
遂には、ＡＡランクを明らかに超えるくらいまでに膨れ上がった。

「スターライト……」

なのはの口から紡がれた言葉を聞いた瞬間。
サクラの背筋を一瞬ではあるが、物凄い悪寒がよぎった。
間違いない。以前にも似たような状況を経験した事がある。
それは確か――――――。

「ブレイカー！」

……サクラが思考を働かせることが出来たのはそこまで。
次の瞬間、桜色の閃光によってサクラの視界は埋め尽くされた。

同時に地面に叩き付けられたような衝撃に襲われ、自身の身体が吹き飛ばされるような感覚を覚える。

「っ！？」

そして数秒も経たぬ内に、サクラの全身を再び衝撃が襲う。
今度の衝撃は集束砲によるものではなく、ビルの壁に叩き付けられた際に生じたもの。
一瞬意識が飛びそうになったが、何とかこらえて意識を繋ぎ止める。

『マスター、大丈夫ですか？』

「何とか……ね。お兄ちゃんのフルドライブバーストよりかはマシだけど、いたたた……」

アルタイルの問いに痛みを押し殺しながらそう答え。
周囲を覆っていた白煙に紛れてその場を離脱。物陰に隠れて息を殺す。
魔力探知で居場所は探られるだろうが、それでもしばらくは煙で視界が効かないはず。
そう考え、これまでの状況から対抗策を練るべく、サクラはアルタイルと言葉を交わす。

「これはもう、モード２ｎｄで行くしかないね」

『そうですね……。今のままだと確実に勝てない、と言う事が分かりましたし』

サクラの言葉にアルタイルも肯定の意を示した。
元々、ミッド式魔法の行使をサクラは苦手としている。

なのに何故、ミッド式でなのはに挑んだのか。答えは至って単純。

「はぁ……。遠距離攻撃があるからって、ミッド式を選んだのが間違いだったかな……」

『それだけですか！？　わざわざ、ヴァジュラで戦いを挑んだのは！？』

「そうだよ。って言うか、それ以外に無いもん」

アルタイルのツッコミにさらりと返事を返すサクラ。

……そう。理由はたったこれだけなのである。大雑把と言うか、適当と言うか。

ともかく、兄であるレンの影響を多大に受けているのは間違いない。

「とにかく、ここからは近接主体で行かないとね」

『了解。何で行きます？　いつも通り、オルクスですか？』

「いいや、これで行くよ。……クリーヴァ」

サクラの言葉と同時に、右手に持っていたアルタイルが輝きを放ち出す。

杖形態のアルタイルは光の中で、山吹色の魔力刃を持つ両刃剣へと変化。

今度は左手で両刃剣を構えたサクラは、隠れながらなのはを見据えて呟いた。

「モード２ｎｄでケリつけるよ。……３ｒｄは使いたくないからね」

『そうですね……。見せましょう、私達の全力を』

かくして、模擬戦はセカンドステージへと移り行く。
集束砲撃・射撃魔法の撃ち合いだけから、接近戦も絡めた本格的な戦いへと……。

――――――――――――――――

同時刻、次元航行艦“ノクターン”。
艦内の一角にある、執務官専用オフィスに二人の男女の姿があった。

「コーディ、引き継ぎ事項はこれで全てだよな？」

「えぇ、これで全部ね。レンにしては珍しく期限までに全部仕上げて来たのね」

男性の方は最早お馴染みとなりつつある我らが執務官長、レン・T・ハラオウン。
コーディと呼ばれた金髪青瞳の女性は、レンの副官を務めるノクターン所属の執務官、コーデリア・ヴォルクステイル。
二人は本局への提出書類の他に、レンからコーデリアへの引き継ぎ事項について話し合っていた。

「ヲイコラ。それだといっつも俺が期限を守ってないように聞こえるじゃねーか」

「事実じゃない。リッチよりはマシだけど、レンだって期限守らない事が多いでしょ？」

レンの反論に対して、ジト目で見ながら更に反論するコーデリア。
それに、まぁそうなんだよなぁ……と呟いたきり、レンは黙り込んでしまう。
どうやら図星らしい。何とも分かりやすくて、こちらとしても大助かりである。

「……後で潰してやろうか？」

冗談だから安心しろ。それと地の文にツッコミは勘弁してくれ。
……ごほん。若干怪しい視線をコーデリアから感じたかどうかは分からないが。
レンは一度大きく咳払いをしてから、話題を変えて話を切り出した。

「さてと、俺は予定通り来週から機動六課へ出向になるから。後はよろしく頼むぞ」

「任せといて。リッチとチャールズがヘマしないように、きちんと見張っておくから」

レンの言葉に右手で軽く胸を叩くコーデリア。
自信満々のコーデリアを見たレンは大きく頷き。
そういえば、と呟いてからコーデリアに問いかけた。

「そういや俺が六課に在任してる最中なんだろ？　チャールズとエリカが出向くのって」

「そうなるわね。流石にその時はレンに戻って来て貰いたいけど……無理かな？」

「……話はつけてみるさ。正直、六課は俺が居ると戦力過剰も良い

所だし」

更なる問いかけにレンはしばし黙った後にそう答える。
はたから見れば言いすぎかもしれないが、六課の戦力を考えるとこれが現実なのだ。
如何せん、Ｓランククラスの魔導師や騎士が、一つの部隊に数人居る時点で既におかしい。
そこへ更に、自分を含むＳランクの魔導師と騎士を送り込む事を六課の部隊長は選択した。
……本気かどうかをその時聞いたのだが、『私は本気ですよ？』とあっさり返されたのをレンは鮮明に覚えている。

「それと知り合いを通して、執務官を一人借りれないかどうかも話してみる」

「知り合いって……もしかして、あの人？」

「あぁ。その人の部下に優秀な執務官が居るんだ。……そいつを願わくば引き抜けないか、ってな」

コーデリアの問いにレンはゆっくり頷き。
同時に手元にコンソールを呼び出して、しばらく叩いた。
やがて、レンとコーデリアの視線の先に、一つのディスプレイが出現する。
そこには、レンやコーデリアが着用しているのと同じ、黒色の執務官制服に身を包んだ紅髪の少女姿が映し出された。

「へぇ、この子が……。でも、引き抜いた所で現状打破は無理そうじゃない？」

「その辺は何とかするさ。俺の人脈、なめて貰っちゃ困るぜ」

任せとけ、とばかりに自信たっぷりの表情で答え。
素早くコンソールを叩いて、ディスプレイを消したレン。
そして改めて、報告書に一通り目を通してから。ゆっくりと歩き出す。

「じゃあ俺はそろそろ行く。後は頼むぞ」

「了解。ついでに何かしらのお土産、よろしくね？」

「はいはい。まぁ、あまり期待はしないでくれよ」

コーデリアの言葉にやや流し気味にレンは言葉を投げ。
あらかじめ纏めておいた荷物を片手に、オフィスを出て行く。

「――――と、その前に。報告書にミスがあったから、修正してからね？」

「……分かった」

……直前に呼び止められ。
突き出された報告書の修正をしてから、改めて出て行く事になった。

（後編へ続く）

第二話：エース・オブ・エース（前編）（後書き）

如何でしたでしょうか？

後編はなるべく早くお届け出来るように努力いたします。

ではでは！

第二話：エース・オブ・エース（後編）（前書き）

かなり時間が掛かってしまいました……。
時間をかけてちまちまと書いたので、文章が所々おかしいかもしれません。

では、どうぞ！

第二話：エース・オブ・エース（後編）

バインドまで使った周到な用意で、スターライトブレイカーをサクラに命中させたなのは。
が、なのはは命中させた感触は感じたものの、直撃させた感触を感じていなかった。
……やがて、スターライトブレイカーの命中と同時に発生していた、白煙が徐々に晴れて行く。
白煙が晴れたなのはの視界の先には、大小様々な傷を負ったサクラが立っていた。
少し前までとは違い、山吹色の魔力刃を持つ両刃剣を構えた状態で。

「いたたた……。流石にビルへの直撃は痛かったですよ？」

「その割には随分と楽そうに見えるけどね。その剣はレンさんの受け売り？」

サクラの言葉に笑って返事を返し、逆に問いかけたなのは。
その視線は、サクラが左手で構えている両刃剣に注がれていた。

「まぁ、そんな所です」

『私自体、エルシウスとは姉妹機ですからね』

乾いた笑いの後に肯定の意を述べたサクラ。
それに続いて答えたアルタイルの言葉を聞いて、ふむふむと頷いたなのは。
サクラの兄、レンのデバイスであるラグナロクとバルディッシュ・アサルトシュラウド。

その双方の利点を取り入れた機体が、サクラが使っているアルタイルだ。
先程まで使っていた杖形態はミッドチルダ式、今使っている剣は古代ベルカ式。
異なる二つの術式の魔法を一機で行使出来るようにカスタマイズされた機体……。
はやてのシュベルトクロイツもそうだが、完全に戦闘用に特化した機体は恐らくアルタイルが唯一であろう。

「では……。そろそろ行きますね？」

呟いた直後にサクラの姿はなのはの視界から消え去り。
次の瞬間には、なのはの丁度真上でアルタイルを上段に構えていた。

――――早いっ！

なのはが咄嗟に割り込ませたレイジングハートと、振り下ろした振り下ろしたアルタイルの刀身が交わるのはほぼ同時。
撃ち込まれた予想以上に重い一撃に、なのはは内心で驚くと同時に感心もする。
だが、このまま黙って防いでるだけには行かない。重心をずらす事でバランスを崩させ、膠着状態から離脱。
そのままレイジングハートの矛先をサクラに向けて、至近距離からショートバスターを放つ。

「っ！？」

魔力を感じると同時に、なのはを見据えたサクラの視界を桃色の魔力が埋め尽くす！
避けるか、受け止めるか。……考えたその次の瞬間には、サクラの

答えは既に決まっていた。
自分が出せる限りの速度で左手を振りかぶり、迫り来る集束砲を“真っ二つに斬り裂いた”のだ。

アルタイルを中心として斬り裂かれた魔力は、数秒の後に消滅。
そのままなのはへと迫り、サクラはアルタイルをなのは目掛けて振り下ろす！

『Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ』

振り下ろされた一撃を、レイジングハートが自動で生成したプロテクションで受け止める。
だが、サクラは自らすっとアルタイルを引くと、そのまま更に振りかぶって二撃目を叩き込む！
……しかし、またしてもプロテクション――今度は、なのはが自分で作り出したより強固なもの――に阻まれた。
が、サクラは臆する事なく再びアルタイルを引き、またしてもなのは目掛けて振りかぶったではないか。

一回、二回、三回、四回。それから短時間の間に、同じような剣撃をサクラは四度繰り返した。
狙う場所以外はほぼ変わらぬサクラの剣撃を、こちらも同じようになのはは防いでいく。
そして、五回目。少し溜めを作った剣撃をなのははいつもと同じように防いだが――――。

「ブレイク！」

突如叫んだサクラ。同時にそれまで剣撃を防いでいたプロテクションが一瞬にて消滅。

驚きの余りに一瞬だけ無防備になったなのは目掛けて、サクラは電撃を纏ったアルタイルを振りかぶり、左から右へ斬り払う！

『雷光剣！』

……同時に閃光と爆発が起き、サクラの視界は煙で覆われる。
煙が起こるのを見たサクラは少し離れたビルの上へと離脱し、バリアジャケットに付着した目立つ埃を手で払う。

「当たったかなぁ？」

『当たったとは思いますが、詰めが甘かったかと。防がれていてもおかしくないですね』

問いかけにアルタイルは冷静に分析し、そう答えた。
サクラ自身も当たった感触は確かに感じていたが、どうも納得いかなかったようだ。
本来ならば、雷光剣はカートリッジを消費する事が前提である技。
咄嗟に、しかもカートリッジロード無しで放ったのならば、威力は当然落ちる。
万全の状態でもそこそこの威力しかないのに、万全でなければ防がれていてもおかしくない程になってしまう。
アルタイルが指摘した通り、防がれていても全くおかしくない一撃だったのである。

『！　マスター、今すぐプロテクションか回避を！』

「えっ？　っ！！」

アルタイルの警告に一瞬だけ首を傾げたサクラだったが、直後に意

味を理解。
咄嗟にプロテクションを展開。……直後に、サクラ目掛けて桃色の集束砲が飛んで来た！
苦痛な表情で、サクラは何とか集束砲撃を受け止めた。同時に、前方を覆っていた煙が晴れる。

『Ｉｔ　ｗａｓ　ｐｒｅｖｅｎｔｅｄ．ｍａｓｔｅｒ』

「あちゃー、やっぱりこれだと防がれちゃうか」

無機質な機械音声と、透き通る凛とした声。
煙が晴れたその先には、こちらに向けてレイジングハートを構えたなのはの姿があった。
バリアジャケットは所々破れてはいるものの、表情からはまだまだ余裕と言う気持ちが伝わってくる。

「……やっぱりダメだったね」

『仕方ないです。まだまだこれからですよ』

落胆するサクラをアルタイルが諭す。
それもそうだね、と割り切ってアルタイルを構え直したサクラ。
一度深呼吸をして頭を落ち着かせてから、改めてなのはへの対策を考える。

ベルカ式に切り替えている今、使えるのは近距離からの魔力斬撃のみ。
闇雲に突っ込むと、先程と同じようにスターライトブレイカーの餌食になってしまう。
ならば、取る方法はただ一つ。高速で懐に潜り込み、使える最も強

力な剣撃を叩き込む。それだけだ。
……そうと決まれば、まずはなのはから隙を作りだす事から始めなければならない。

「レイジング・パッセルド」

既にオートで発動している身体強化を更に発動して、効果を上乗せ。
動作速度・反応速度の強化と魔力消費量軽減。即ちこれは、速度重視の戦法に切り替える事を意味する。
感覚を幾分か馴染ませた所で、サクラはアルタイルを正眼に構えてなのはを見つめ……。音も無く地面を蹴って姿を消した。

「気を付けて、どこから来るか分からないから」

『Ｙｅｓ，ｍｙ　ｍａｓｔｅｒ』

レイジングハートに注意を促し、姿を消したサクラの魔力反応を追いかけるなのは。
僅かな量の魔力でも逃さないとばかりに、五感を集中させる……。
やがて、サクラの魔力反応をなのはは察知した。サクラが居るのは――――上空！

「天地二段ッ！」

重力に従って落下してきたサクラは、なのは目掛けてアルタイルを振るった。
振るったアルタイルの一閃は寸前の所で避けられたが、これはあくまで初撃に過ぎない。
そのまま今度はなのはの真下から、なのは目掛けてアルタイルを払う！

「っ！！　間に合わないから、受け止めるよ！」

『Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ』

プロテクションは間に合わないと悟り、レイジングハートをアルタイルの軌道上に持ってきたなのは。

……魔力刃と金属の杖がぶつかり合って、鈍い音を周囲に響き渡らせる。

防がれてはしたものの、プロテクションで受け止める事を前提にしていたなのはに予想外の行動を取らせた。

サクラは再び自ら剣を引くとなのはと同じ高さまで舞い上がり、今度は防がれるのを覚悟で連続で剣撃を叩き込む！

一閃、二閃、三閃！

撃ち込んだ剣閃の全てが、なのはの前で無力と化す。

が、これも全て計算の範囲内。今はあくまで一撃を叩き込む為の“隙”を作り出す段階に過ぎない。

“隙”を作り出せなければ、例え攻撃がなのはに届いたとしても意味が無いのだ。

「はあっ！」

そして再び、剣閃がなのはへ向かって撃ち込まれる。

先程の連撃から少し時間が空いていたからか、なのははプロテクションで剣閃を防いだ。

……瞬間、サクラは自分の両手足が自由を奪われた事を感じる。サクラの両手足を縛っているのは……バインド！

しまったと思った時には先程と同じように、なのははサクラの頭上でレイジングハートに魔力を集束していた。

「そう何度も同じ手は……」

しかし、サクラの動きは先程とは違った。

簡単に攻撃を受けるのではなく、抜け出して避けようとすること……。

相手が“隙”を作るのを待つだけではなく、自分から“隙”を作り出そうとすること！

「くらいませんっ！」

『バインドブレイク！』

同時に、サクラの両手足を縛っていたバインドが音を立てて砕け散る。

それを見たなのはは驚く……が、直ぐに表情を引き締めて集束していた魔力を解き放つ！

自身へと迫り来る集束砲――ディバインバスター――を見ても尚、サクラは迷わずに突貫。

身体を捻って回避し、サクラはアルタイルの刃に水と風――二つの異なる属性概念――を纏わせた。

「風水十字！」

最初に放った横薙ぎの一撃には、風の属性を。

続いて叩き込んだ縦の袈裟斬りには、水の属性を。

それぞれ纏わせて、なのはの懐に潜り込んでから撃ち込んだサクラ。

一撃目はバリアジャケットを少し掠める事が出来たが、二撃目は完全に防がれてしまった。

「まだまだ！」

『ロードカートリッジ！』

が、その程度では諦めない。

空薬莢を放出したアルタイルを握り、再びなのはを目掛けて振り下ろす。

『Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ』

それを見て、プロテクションを生成したレイジングハート。

より強固となったプロテクションと、アルタイルの刃が幾度もぶつかり合う！

鈍い金属音が幾度となく響き、僅かな金属片がこぼれ落ちる。

何とか引き離そうと自分から離脱したなのはだったが、サクラは距離を開ける事無くなのは目掛けてアルタイルを振るう！

『Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ！』

同時に、またしてもレイジングハートがプロテクションを生成。

コンマ数秒の後に、プロテクションとアルタイルは再びぶつかり合う！

しかし、サクラが放ったのはただの攻撃ではなく、刃に電撃を纏う剣撃。

先程放った雷光剣の本来あるべき姿。……その名を『雷鳴剣』。

なのはが雷鳴剣の一撃を防いだ事を確認したサクラは、ふっと笑みを浮かべた。

浮かべた笑みに怪訝な表情をするなのは。が、その笑みの意味を直

後に知る事になる。

『Ｍａｓｔｅｒ！』

レイジングハートから発せられた警告。しかし、時は既に遅し。
次の瞬間、意識が飛びそうなぐらい激しい衝撃をなのはは全身に受けた。

――――な……に……。これ……？

上から下まで一気に突き抜けたような衝撃。
おまけに左右の手足も自分の意志で動かす事が出来ない。
バインドで拘束されてもいるが、それとは違う……。神経の感覚自体が無いような感じだ。

「上手く行ったね。アルタイル、行くよ！」

『了解！　ロードカートリッジ！』

少し離れた所で様子を見ていたサクラはアルタイルを両手で構え。
最後のピースを埋める為に、再びなのはの懐へと潜り込む。
今度は牽制目的ではなく。自分が使える“最も強力な剣撃”を撃ち込む為に！

「マルチウェイ！！」

『ストライクシフト！！』

なのはの眼前でサクラの姿は消え。
姿はおろか魔力反応すら捉えられない内に、なのはの身体を剣撃が

襲う！
一閃。そしてまた一閃。残像すら捉えられない程の速度で、なのはに剣撃が撃ち込まれる。
――――マルチウェイ・ストライクシフト。
限界を超えた速度で幾重もの剣閃を叩き込む、サクラの奥義。
使用者の身体にも負担をかなり掛けるが、威力は折り紙付きである。
回避する事はおろか、動く事すら出来ないなのはに容赦なく剣閃を撃ち込んだサクラは……。
「はあっ！」
十数撃にも及ぶ剣閃の後に、止めの一閃を叩き込んだ！
同時に衝撃で煙が巻き起こる。それに紛れて、サクラは近くのビルの屋上に姿を現す。
「これなら流石に……」
『なのはさんでも無理でしょう。マルチウェイを全部当てましたからね』
ドッと押し寄せて来た疲労で表情を歪めながらも。
未だに煙で覆われている前方を見据えながら、勝利を確信したサクラ。
なのはが受けた衝撃の正体。それは、雷鳴剣が発生させた魔力雷だ。
雷鳴剣はその名の通り“雷を鳴らす”技。発動には、電気の魔力変換資質持ちが前提となる。
電撃を纏った一閃を引き金として、数秒の間の後に相手に魔力雷を

相手に直撃させて自由を奪う。
サクラはこの内の後者をバインドと合わせて、なのはの足止めとして使用。
そして動きが止まっている間に、普通は全てを当てられないマルチウェイを全て当てたと言う訳だ。

雷鳴剣とマルチウェイ・ストライクシフトの大がかりなコンボ。
これぱっかりは流石のなのはも耐える事は出来まい、とサクラは思っていた。
直後にバインドで両手足を拘束されるまでは。

「っ！？」

突然、バインドで縛られた事に驚くサクラ。
抜け出そうとバインド・ブレイクを試みたが、かなり強固らしくビクともしない。

「うーん、惜しかったかな。最後のが直撃してれば負けてたかも」

『Ｌｏａｄ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ』

自身の上から聞こえた声にサクラは首だけ動かして見上げる。
その先にはバリアジャケットがかなり破れながらも、レイジングハートを構えるなのはの姿があった。
サクラにとってはマルチウェイを全て受けて尚、立っているなのはに一瞬だけ恐怖を覚える。

「でも、今回は私の勝ちだね」

『Ｓｔａｒｌｉｇｈｔ　Ｂｒｅａｋｅｒ』

集束されていた魔力はレイジングハートの機械音声によって解き放たれ。
視界を桃色の魔力で埋め尽くされると同時に、サクラの意識は飛んだ。
……サクラの何気ない一言によって始まったこの模擬戦。
最終的には、スターライトブレイカーの直撃によるサクラの負け、と言う形で幕を閉じた。

――――――――――――――――

目を開くと、まず最初に映ったのは真っ白な天井。
続いて全身に軽い痛み。そして、止めとばかりに頭痛と眩暈。
それら全てを一瞬で体感してしまったサクラは、痛みに耐えて何とか上体を起こした。

白一色の壁と天井。恐らくベッドを仕切っているであろう白いカーテン。
外の景色は近くに仮想の市街。遠くには、夕焼けに染まりつつある六課隊舎の対岸にあるクラナガンの本物の市街。
と、ここまでを確認した所で、カーテンが開かれてその向こう側から一人の女性が姿を見せた。

「あ、気が付いた？」

「シャマル先生……」

カーテンを開けて声をかけて来た女性は、見慣れた人物。

セミロングの金髪に紫色の瞳。機動六課の制服の上から白衣を羽織っている。
六課の健康を預かる皆の世話役にて、ヴォルケンリッターの『湖の騎士』ことシャマルであった。

「あの、何で私はここに……？」

「覚えてない？　なのはちゃんの集束砲を受けて、今まで意識を失ってたのよ？」

自分がここに居る事に、最初は違和感を覚えていたサクラ。
が、シャマルの言葉を聞いた直後に、今までの記憶が脳内で徐々に鮮明になって来たらしく。
若干苦笑い気味になりながら、窓の外へと視線を向けて答えた。

「……最後に飛びっきり大きいのを貰いました。あれが今の私となのはさんの差なのかなぁ、って思います」

「私も最初は何事かと思ったけど、なのはちゃんが貴方を連れて来たから直ぐに分かったわ」

「あ、そうだったんですか……。情けないですね、私」

シャマルの言葉にサクラは驚き、その後は黙り込んでしまう。
あれだけ自分が必死になったのにも関わらず、なのはからすれば片手でどうにかなる程度。
改めて、なのはの凄さと自分の弱さを嫌でも痛感させられたサクラ。
……と、その時。扉をノックすると同時に女性の声が聞こえた。

「シャマル、サクラの容態はどんな感じ？」

声の主はシャマルの返事を待たず、部屋の中へと入って来る。
腰の辺りまで伸びた茶髪に緑色の双眸。シャマル同様、機動六課の制服の上から白衣を羽織っている。
女性はサクラもシャマルもよく知る人物。シャマルと同じく機動六課の医務官にて、凄腕の回復魔法の使い手。
エーデルリッターの参謀格、『明朝の騎士』ことアリス・キャロットだった。

「何だ、もう目が覚めてるじゃない」

「アリス!?　どうしてここに?」

「引き継ぎでちょっとトラブルがあってね。さっきまでずっと立て込んでたのよ」

サクラの問いに、うっすらと疲労の混じった表情で答えるアリス。
詳しい理由は聞かないで欲しい、と言っているようにもサクラは感じた。

「じゃあアリス、後はお願いね」

「オッケー、任せておきなさいって」

そう言い残すとシャマルは部屋から出て行き。
部屋にはベッドで上半身を起こしているサクラと、椅子に座るアリスが残るのみとなった。
気を利かせてくれたシャマルに胸の内で感謝しつつ、アリスの方を見てゆっくりと問いかける。

「で、改めて聞くけど……。アリスはどうしてここに居るの？」

「私はシャマルをサポートするために呼ばれたの。シャマルも私なら安心出来るだろうって言う、はやてちゃんなりの配慮よ」

サクラの問いかけに、アリスは半分予想していたかのような速さで言葉を返す。

シャマルとアリス。元々の経歴を辿れば同じ存在であった二人の守護騎士。

それは他の騎士達にも言える事ではあるが、ことシャマルとアリスに関しては結びつきがより深いようだ。

……二人とも医務官であり、尚且つ仕事場が同じせいもあるかもしれないが。

「じゃあ、お兄ちゃんや私達を呼んだのもはやてさんって訳？」

「そういう事になるわね。最も、呼んだのには別の理由があるみたいだけど」

「別の理由って何？」

「それは私も聞かされてないから分からないわよ」

「ふーん……」

アリスの口から出た“別の理由”と言う言葉。

サクラはアリスに問いかけるも、当の本人も分からずじまい。

だが自分達を裏技まで使って一部隊に呼び寄せる程だから、“別の理由”と言うのは相当なものなのだろう。

「どちらせによ、レン君と同じ部隊で働けるのは良い事だと思うわ。きっと今後に役立つはずよ」

「あれ、アリスってお兄ちゃんと一緒の部隊に居た事、あったっけ？」

アリスがレンと同じ部隊に居た、と言う点に疑問を持ったサクラはアリスに問いかける。
医務官であるアリスと執務官長であるレン。二人が同じ部隊で働く事はまず有り得ないはずだ。

「一時期、私の所に出向で来てた事があるのよ。ここを除けば一緒になったのはその一回きりだけど」

アリスの言葉を聞き、サクラはなるほどと納得したような表情で頷く。
一時期と言っても数年にも及ぶのだが、レンは管理局の様々な部隊へ出向していた事がある。
これに関しては色々と事情があるが、話すのはまたの機会にさせて頂こう。

『お取り込み中の所、申し訳ありません。マスター、メールが届いています』

と、その時。
サクラに首からぶら下がっているアルタイルが、メールの着信を二人に告げた。

「誰から？」

『なのはさんからです。訓練が終わったので食堂まで来てくれ、と言う事らしいですね』

アルタイルの音声を聞いた二人は窓の外へと視線を向ける。
先程まで茜色に染まっていた空は、既にうっすらと夜の気配を漂わせていた。
時刻も夕食にはまだ少し早いが、準備をするとなると丁度良い時間である。

「そろそろ行きましょうか。流石に待たせるのも悪いし」

「そうだね。願わくば、私が小さい頃の話が出ませんように……」

自分が不利にならないよう、不安な表情でサクラは祈りつつ。
アリスと共に部屋を後にして、食堂へと向かうのであった。

激動の一日は無事に終わりを告げた。
しかし、これはこの後に待ち受ける物語のプロローグにすぎない。
様々な人々と時空管理局を巻き込んで、物語は徐々に進んで行くのだから……。

――――――――――――――――

「なぁコーディ、本当に大丈夫なのか？」

「どうしたの？　リッチらしくないじゃない」

「今日から来る新入りだよ。レンの代わりが務まるとは思えないん

だが」

サクラがなのはに撃墜されたのとほぼ同時刻。
時空管理局本部内、次元航行艦ノクターン専用オフィスに二人の男女の姿があった。
女性の方はノクターン所属の執務官、コーデリア・ヴォルクステイル。
リッチと呼ばれた茶髪の男性は、同じくノクターンに所属する執務官のリチャード・スティルスバーグ。

レンとは同い年であり、尚且つ同期に当たる二人。
執務官に成り立ての頃から見て来た二人からしてみれば、こういった行動は最早日常だとかそうでないとか。

「大丈夫じゃない？　あの子を引き抜いたのは私じゃなくてレンだし」

「結局の所、原因はそこに回帰するんだな……」

コーデリアの言葉にげんなりとした表情を浮かべたリチャード。
対するコーデリアは当たり前じゃない、という言葉を顔に貼り付けていた。
自分が中心となって進める事はきっちり終わらせる彼女だが、他人の事（特にレン）に関しては割と大雑把な対応で済ませる事が多い。

「レンに責任を押し付けておけば、どうにかなるわよ。きっと」

「……どうなっても俺は知らないからな」

半ば諦めたような表情を浮かべたリチャードに対して別に構わない

わよ、とコーデリアは返す。
どうやら彼女はあくまで、何かが起こった時の全責任をレンに押し付けるつもりであるらしい。
もし本人がこの場に居たら、到底言う事が出来ないセリフのオンパレードである。

『コーディ先輩、リッチ先輩。どうやら来たみたいですよ』

と、その時だった。
二人の目の前にある液晶ディスプレイに、一人の少女が映し出された。
肩辺りまで伸びたセミロング黒髪に同じ黒色の瞳。二人と同じく黒色の執務官の制服に身を包んでいる。
年齢は二人よりかは下と思われる。恐らくは十代後半もしくは二十代前半だろう。

「ありがと、エリカ。そのままこっちへ通してあげて」

『了解しました～♪』

ディスプレイに映る少女、エリカはコーデリアの言葉に頷く。
同時に液晶ディスプレイはブラックアウトし、何も映し出さなくなった。

「どうやら到着したみたいだな」

今のエリカの通信は、オフィスの入口までレンの後任となる人物が来た事を知らせるもの。
出迎えに行ったエリカは数分としない内に、この部屋まで連れて来るだろう。

部屋は片付けてあり、説明に必要な資料も既に用意してある。後は来るのを待つのみだ。

「そうね。次の航行まで時間も無いし、さっさと説明してしまわないと」

そうだなと頷きかけたリッチだったが。

さらりとコーデリアが流していった重大な事実に気付いてしまう。

――――待て、今コイツは“次の航行”と言わなかったか？

つい数瞬前のコーデリアの言葉を思い出し、脳内で繰り返すリチャード。

そしてやはり、先程の言葉が幻聴では無かった事を確認すると、恐る恐る問いかける。

「……なぁ、次の航行ってマジなのか？」

「マジよ」

「本当にそんなので大丈夫か？」

「きっと大丈夫。全ては神のみぞ知るんだから」

すると、コーデリアは先行きが不安な答えを返してきた。

これには流石のリチャードも呆れるしか無かったが、もう時間は残されていない。

最早、後は全てをコーデリアに委ねて、ヘマを起こさないように祈るだけだ。

「……失礼します」

と、その時。

部屋のドアが開き、執務官用の制服に身を包んだ紅髪の少女が姿を見せる。

その後には、ここまで案内してくるようにと言っておいた、エリカの姿も見えていた。

それを合図にコーデリアとリチャードは頷き合い、表情を引き締めて少女へ視線を向ける。

「ノクターンへようこそ。早速だけど、この艦について説明させて貰うわね」

コーデリアはまず少女を用意していた椅子へ座るよう促す。

同時にリチャードは資料を少女の目の前に置き、部屋の電気を消してスクリーンを下ろす。

あまり時間はかけられない。故に、準備は予め済ませておき、素早く且つ手際よく進めていく。

予め済ませておいた準備を全て有るべき形にした所で、説明を始めるべくゆっくりとコーデリアは喋り出した。

機動六課結成と同じ日。

後に重要な役目を果たす事になる少女の物語は、こうして幕を開けたのだった。

（第三話へ続く）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9326r/

魔法少女リリカルなのは EOSE ～Eternal Breath～

2011年12月1日01時46分発行